

PBL 教育推進プロジェクト

三重大学 P B L 教育実態調査報告書

2018 年 11 月

国立大学法人三重大学

地域人材教育開発機構

目次

1. はじめに	1
2. (全教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査の分析結果	2
2.1 カテゴリーデータに関する分析	2
3. (PBL 授業実施教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査の分析結果	14
3.1 カテゴリーデータに関する分析	14
3.2 クロス集計	24
4. 自由記述の集計と分析結果	38
4.1 Tutor/TA の項目に関する自由記述の集計結果と分析結果	38
4.2 PBL の詳細の自由記述の集計と分析結果	40
4.3 授業内外での教員の関わりの自由記述の集計と分析結果	41
4.4 PBL の成果の自由記述の集計と分析結果	47
4.5 PBL の課題の自由記述の集計と分析結果	48
4.6 現在 PBL を行っていない理由 (自由記述) の集計結果と分析	51
5. おわりに	53

資料 1 質問紙『大学での授業実践に関する調査 (全教員対象)』

資料 2 質問紙『大学での PBL 授業に関する調査 (授業実施教員対象)』

プロジェクトメンバー

1. はじめに

本報告書は、平成 30 (2018) 年 1 月に、PBL 教育に関連して三重大学での授業実践について尋ねるために行った 2 つのアンケート調査の結果を取りまとめたものである。アンケートの一つは「PBL に関する認識や理解」を確認するものではなく現状の授業の実態を捉えるためのもの（以後「(全教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査」と記述）であり、もう一つは、Web シラバスの「授業の特徴」において「PBL」を掲げている教員対象に PBL 授業の実践について尋ねたもの（以後「(授業実施教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査」と記述）である。なお後者の調査に回答した教員に対しては質問内容に重複する点があるため、前者の調査への回答は求めないこととした。得られた有効回答数は前者の調査が 194 回答、後者の調査が 159 回答であった。

三重大学では、平成 16 (2004) 年の国立大学法人化以降、教育目標に掲げた 4 つの力（「感じる力」「考える力」「生きる力」および「コミュニケーション力」）の育成を進めるための中心的な教育方策として PBL 教育を推進してきた。具体的には平成 18 (2006) 年に PBL 教育の導入を開始し、全学で初年度に 100 科目が開設され、本格実施された翌年度には 218 科目、Web シラバス集計が始まった平成 21 (2009) 年度は 400 科目、平成 23 (2011) 年度には 500 科目を越えるに至った。その後は毎年 500 科目以上の開設が続き、平成 29 (2017) 年度も 534 科目になっている。

PBL を取り入れた授業が毎年 500 科目以上開設されているということは、本学で授業を担当している教員数をふまえば、教育 1 名に対して 1 科目の PBL が実施されていることになる。このことは本学では全国に例が見られないほど PBL 教育が実施され、定着していることを示している。それは三重大学の教育の大きな特徴の一つになっている。

このような大きな成果が見られる一方で、この数年間は開設数が一定になっており、開講している教員としていない教員が固定化してきている傾向が見られる。その際 PBL を実施されていない教員がどのような意見を持っていたり、あるいは実施上の困難を抱えているかも十分に理解できていない状況にある。さらに実施されている PBL についても、それぞれの教員がどのような工夫を重ねているか、あるいは PBL 教育の成果と課題をどのように把握しているかなど、その内容について検討が十分に進められていないのが現状である。

こうした本学の PBL 教育をめぐる実態を明らかにするために、PBL 教育の実施の有無を合わせて全教員を対象に、上述の 2 種類の調査用紙を用意して実施した。

本報告は、その調査結果を全体としてまとめたものである。それらは、(全教員対象) と (授業実施教員対象) それぞれの調査のデータ集計結果と分析、及び自由記述欄の分析からなっている。

2. (全教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査の分析結果

2.1 カテゴリーデータに関する分析

2.1.1 回答者の着任年数, 教員経験年数と所属の分布

有効回答 194 名の着任年数と教員経験年数の分布をまとめたものが図 2.1, 図 2.2 である。この図から着任年数は右肩下がりとなっているが, これは教員の構成から考えてやむを得ないことと推察される。それでも, 5~20 年の層はほぼ均等に含まれていることがわかる。一方, 経験年数は 30 年までの階層がほぼ均一に含まれており, 調査データとして偏りのないデータが得られたものと考えられる。

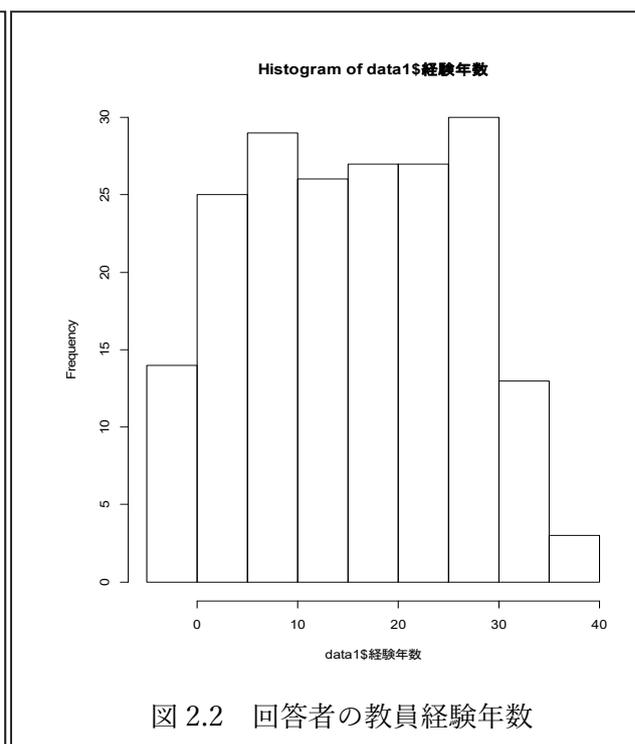
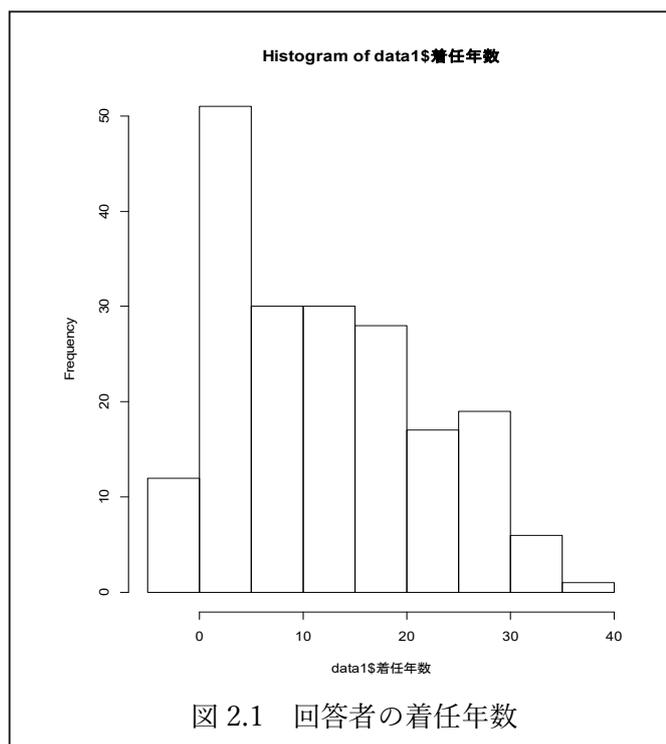
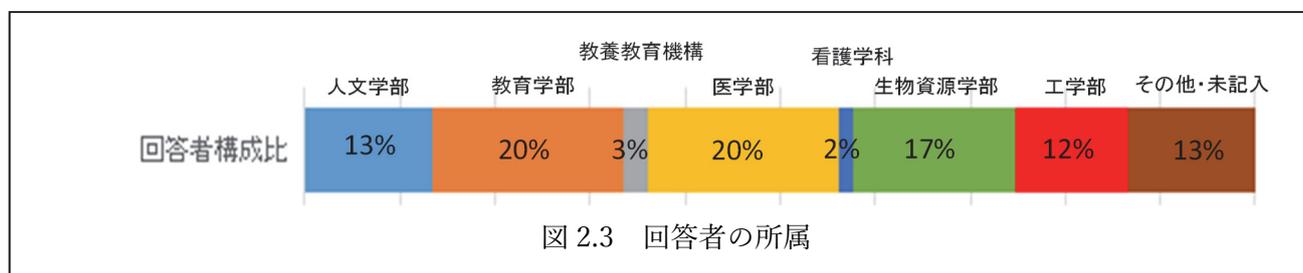


図 2.3 は回答者の所属の構成である。教養教育機構と看護学科は在籍人数から考えて少なくなっているが, 他の学部は 12~20%の範囲にあり極端な偏りは認められなかった。



2.1.2 PBL 実施の有無について

本アンケートでは設問 2 において

(2) 三重大大学では、現在、下記のような概要全てにあてはまる授業形態を「PBL」と捉えています。

- 問題解決もしくはプロジェクト達成との関わりの中で学習が進む
- 教員主導ではなく学生の主体的な活動によって学習が進む
- 協同の活動を通して学習が進む

このような概要を満たす PBL を現在授業に取り入れていますか？

と尋ねており、これに対する回答割合を図 2.4 に示した。図からわかる通り、「有」という回答が全体のほぼ半数を占めており、かなり高い割合で PBL の要素を授業に取り入れている様子がうかがえる。先に述べたように Web シラバスの「授業の特徴」において「PBL」を挙げている教員はこちらの調査には回答する必要がないことを考え合わせると、かなり高い割合であるといえる。

この実施の有無と他の回答との関連性を分析するため、以後「有」と回答した集団を「PBL の実施有のグループ」、 「無」と回答した集団を「PBL の実施無のグループ」と表記する。

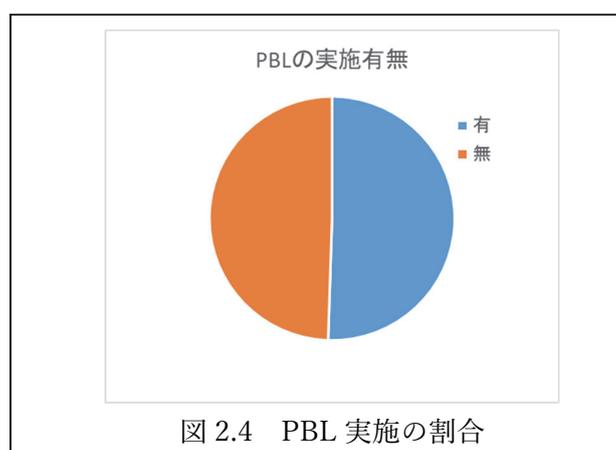


図 2.4 PBL 実施の割合

図 2.5 は所属別の実施の有無の内訳である。この図から工学部と教育学部で「PBL の実施有のグループ」が「PBL の実施無のグループ」に比して 3~4 倍と多いことが大きな特徴として読み取れる。

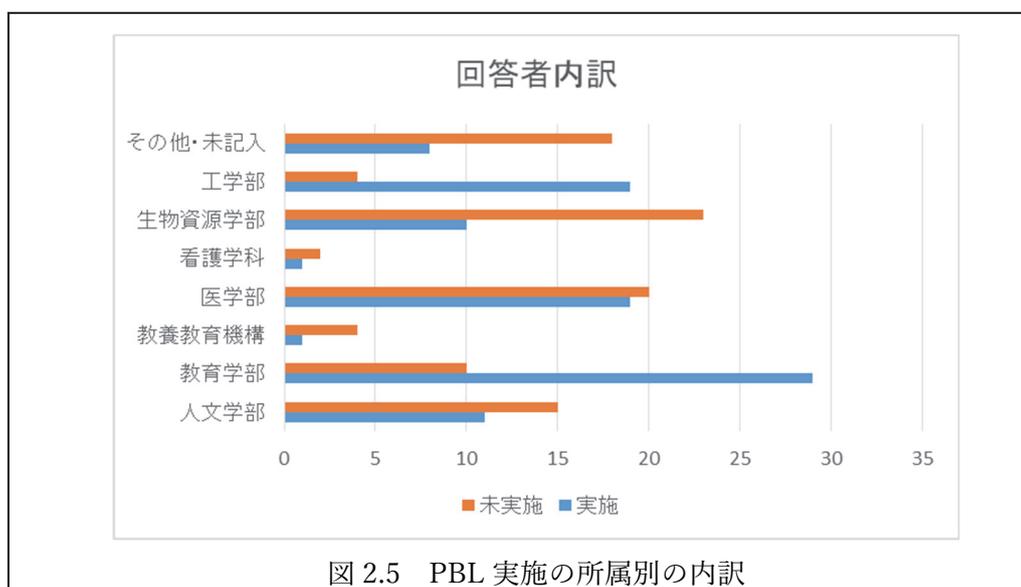


図 2.5 PBL 実施の所属別の内訳

2.1.3 PBL 実施の有無と着任年数の関係

上述の PBL の実施と着任年数との関連をグループ別に調べたものが図 2.6 である。この図から特徴的なこととして、「PBL の実施無のグループ」で着任 5 年未満の階層の人数が多いことが読み取れる。PBL の要素を授業に組み入れることの難しさがあるのか、三重大学での教育年数が短いと実施率が下がっているとも考えられる。同様に PBL の実施と教員経験年数との関連を調べたものが図 2.7 である。グループ間の目立った違いは分かり難いが、経験年数 15～25 年の階層で PBL の実施率が高いことが読み取れる。やはり、教員としての経験を積むことで PBL という選択肢も受け入れやすくなっているのかもしれない。

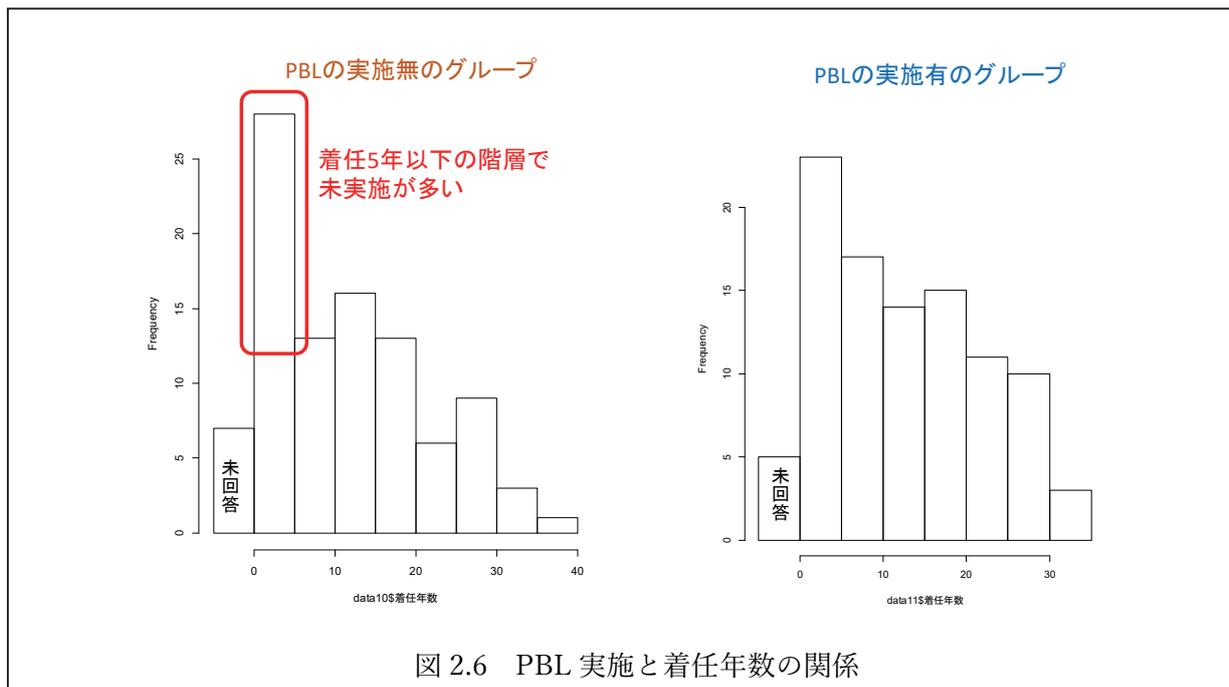


図 2.6 PBL 実施と着任年数の関係

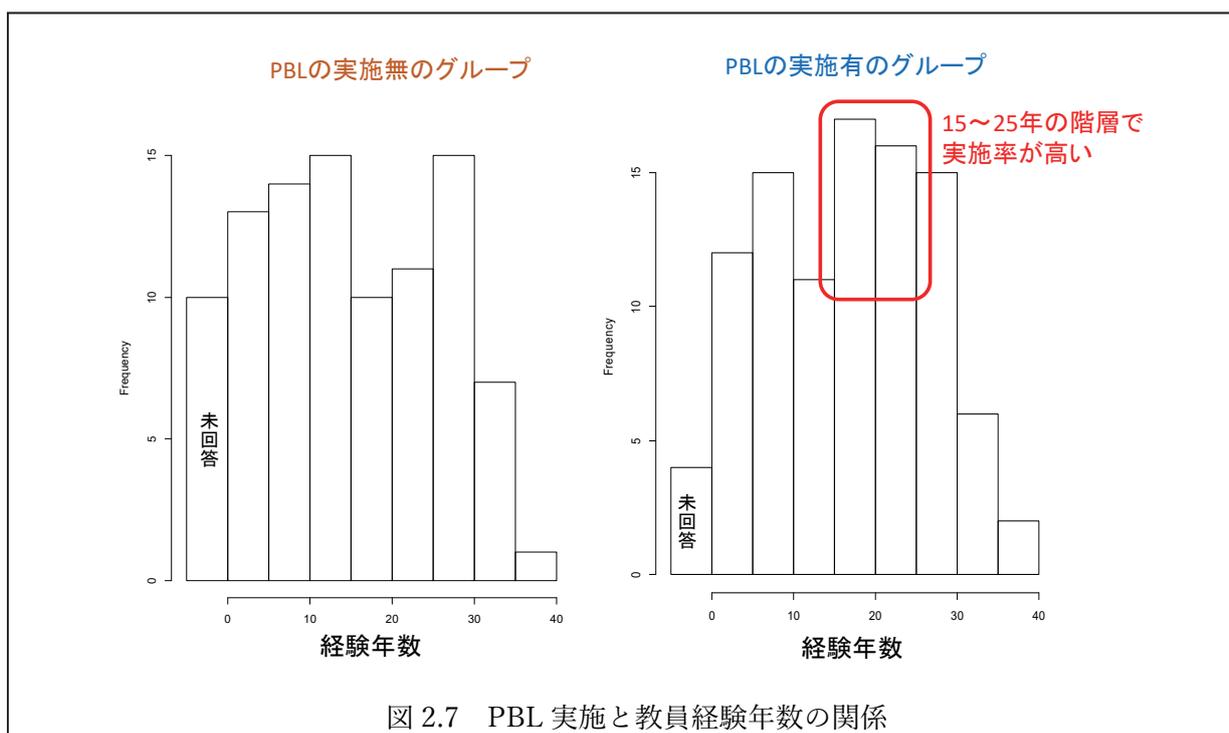


図 2.7 PBL 実施と教員経験年数の関係

2.1.4 PBL への関心と開始のための要件

設問 2 で PBL を実施していないと回答したグループに対して、「(4) PBL に関する興味や関心をお持ちですか?」と尋ねた回答の割合が図 2.8 である。この図をみると全体の 8 割が興味・関心があり、さらにその半数がやってみたいと回答している。全回答者 194 名の約半数が PBL を実施していないが、その約 4 割、つまり全体の 2 割がやってみたいと回答していることになり、40 名近くの教員が新たに PBL を実施できるという余地（潜在力）があることが明らかとなった。では、その実施のための条件が何か尋ねた「(3-2)このようなサポートがあれば PBL を始めてみたいという要件はありますか?(複数選択可)」という設問への回答割合を示したものが図 2.8 である。この図から、授業事例集と人的・経済的支援という要件が高いことがわかる。つまり、PBL を導入したいが具体的にどのようにすればよいかと困っている教員が多く、自分の授業に適した具体的な成功事例のようなものがあれば PBL 導入の敷居が下がると考えられる。また、授業支援という回答はグループ活動などに一人で対応しきれぬのかという不安から TA 等のサポートを求めているものと思われる。経済的な支援もこのための TA 経費などを想定している可能性もあろう。

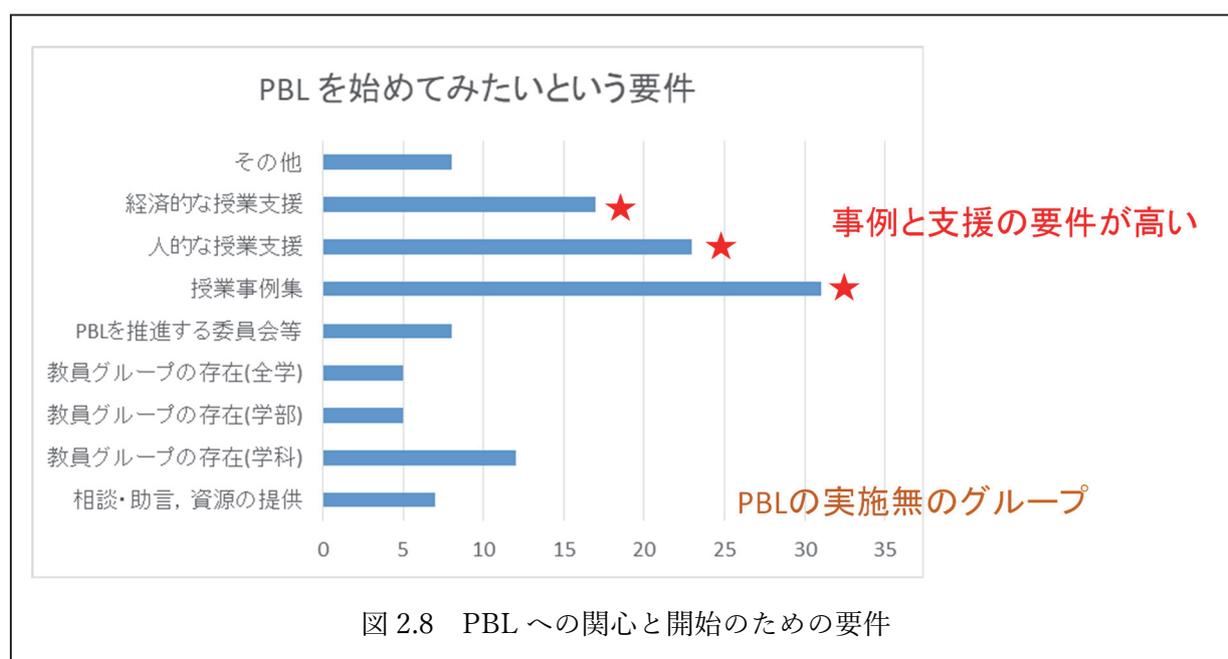
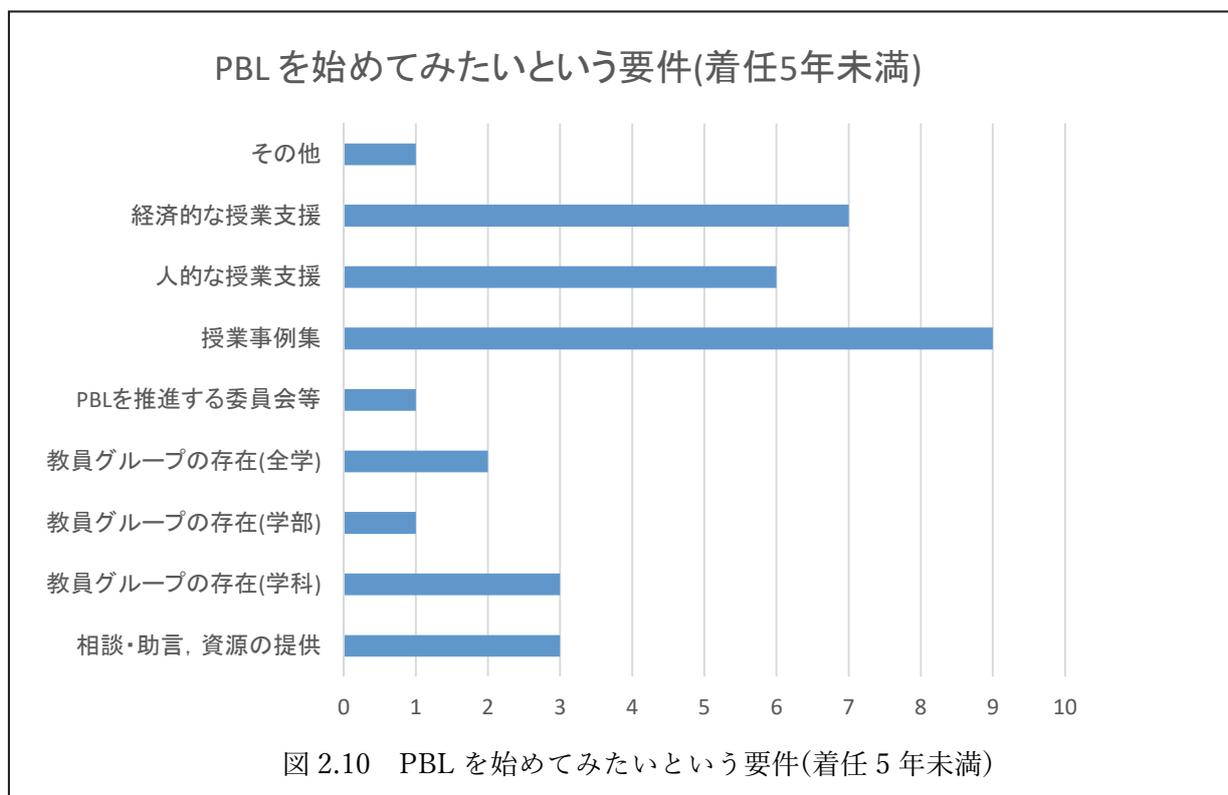
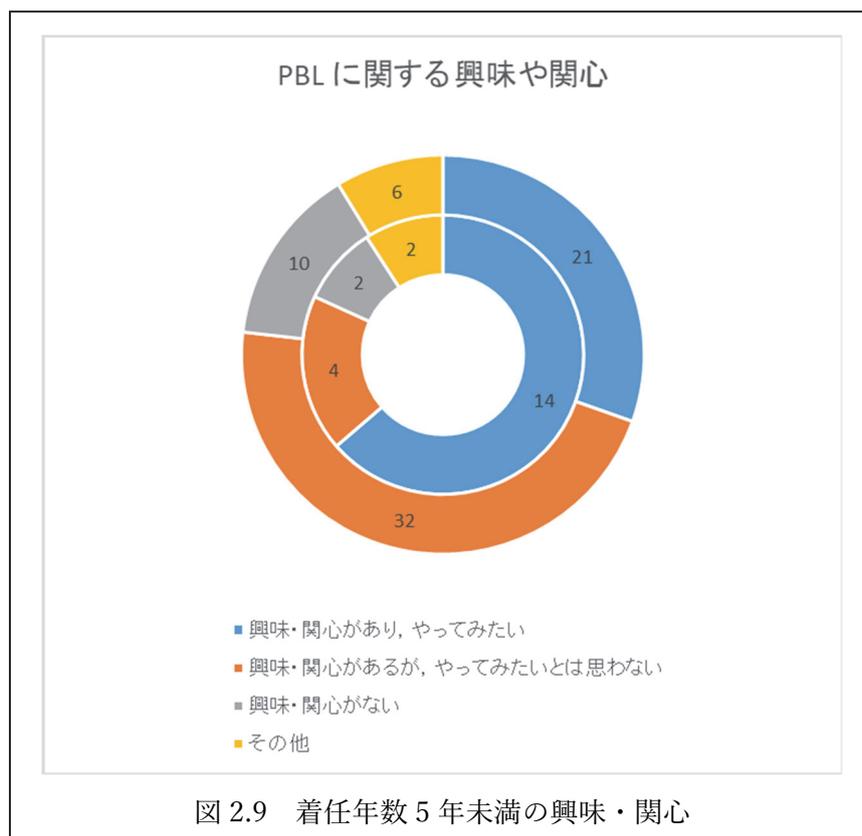


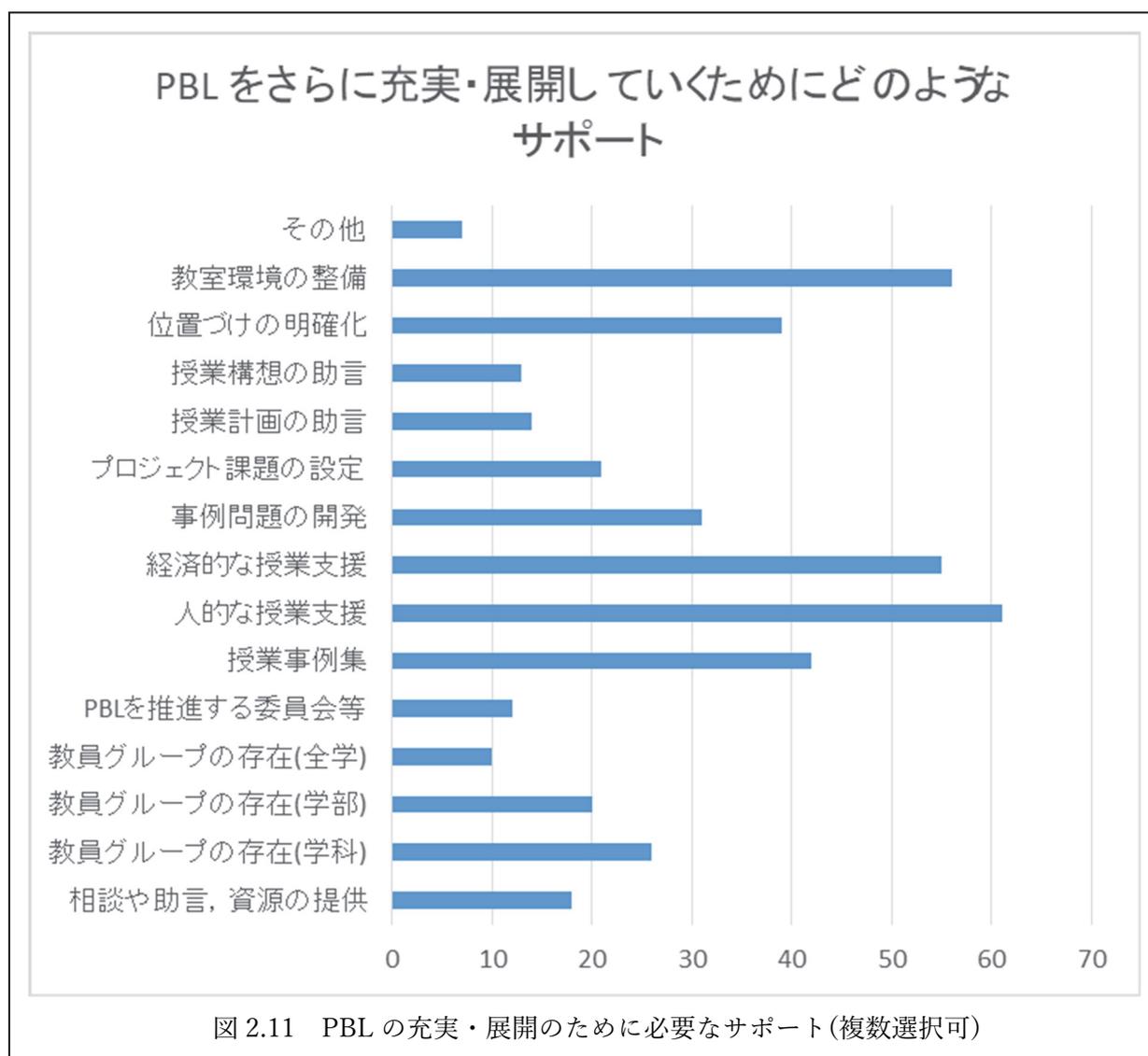
図 2.8 PBL への関心と開始のための要件

これらの回答をさらに PBL の実施が少なかった着任 5 年未満の階層に限定して調べた結果が図 2.9 と図 2.10 である。図 2.9 より、関心・興味は着任年数による違いはほとんどないが、やってみたいという回答が 5 年未満の階層でその以外の階層の倍近くあることがわかる。また、図 2.10 よりその要件は図 2.8 と同じで、授業事例集と人的・経済的支援が特に高いということがわかる。いずれにせよ、やってみたいという教員は一定数存在し、実施のために求めている要件がはっきりしていることが確認できた。



2.1.5 PBL 充実のために求められているサポート

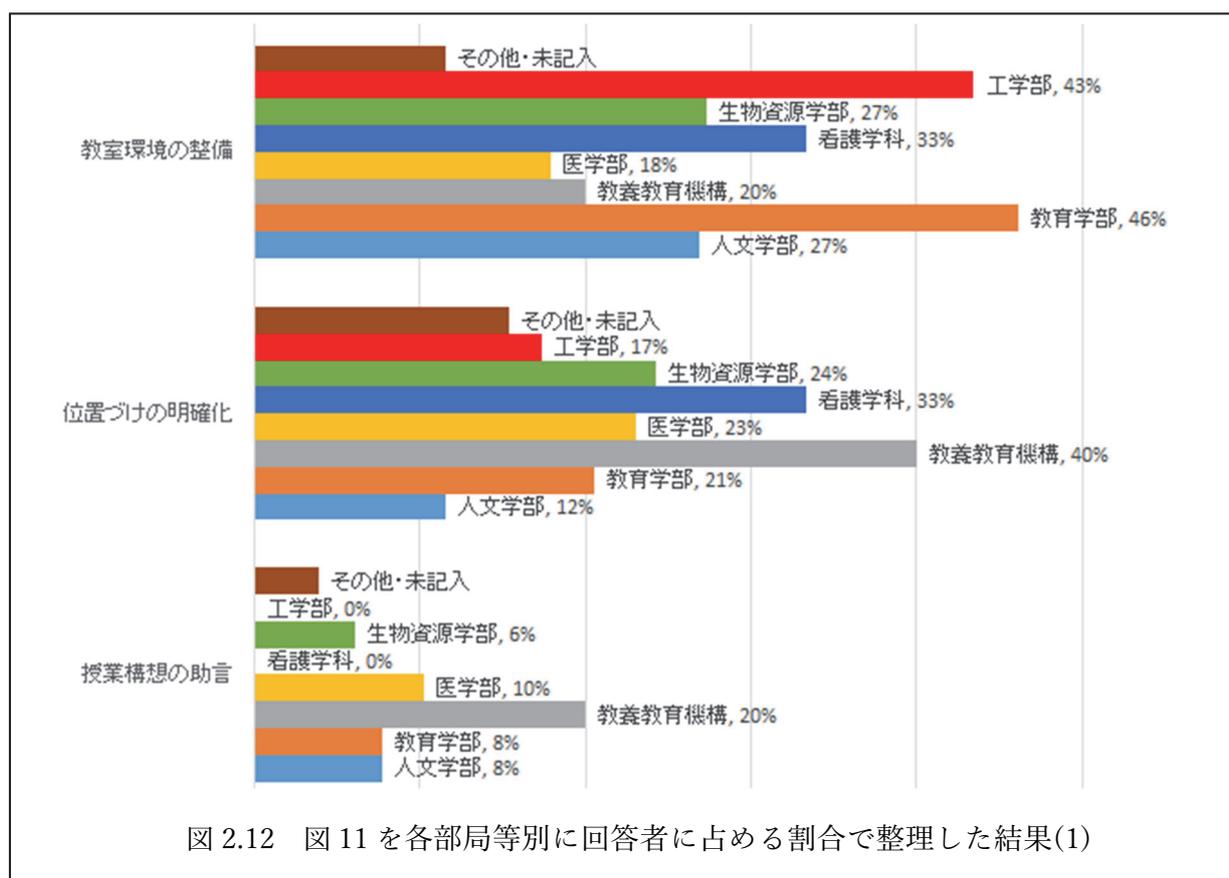
一方、PBL を既に実施しているグループに対して「PBL をさらに充実・展開していくためにどのようなサポートが必要か」を尋ねた結果を図 2.11 に示す。この図から、未実施のグループと同様、授業事例集と人的・経済的支援という要望が高いことが読み取れ、これは実施の有無に関わらず PBL を拡大発展するためには避けられない課題であるといえる。授業事例集は内外の成功事例の情報を積極的に収集し FD 活動なども通じて提供することによって解決できると考えられるが、授業支援に関しては予算の削減が進む現状においてはその解決は難しいと言わざるを得ない。しかし、学生間のピア評価などを積極的に取り入れるなど、授業の実施方法(テクニック)によって解決できる部分も少なからずあると期待される。これも成功事例の収集・導入が解決の一助となろう。



そのほか要望の高い項目として、教室環境の整備と位置づけの明確化がある。教室環境は特にグループワークに適した教室の整備が求められているものと理解する。パソコンの必携化もあり、多様な形態の授業に対応できる教室環境が望まれている。改修のための費用が一時的に必要であるが、恒常的に掛かる費

用ではないため、今後 PBL 導入科目の増加に合わせて順次整備が進むことを期待する。位置づけの明確化に関しては、そもそも「PBL とは何か」という問いを含んでおり、回答者の要望が何なのか明確にすることは難しい。例えば、現状の授業での取り組みが PBL として最善なのかという自問もあれば、予算的なサポートを含めた全学的な共通認識の確立を求めている可能性もある。授業事例集と共に PBL のあり方に関して全学の教員間の共通認識が生まれていくことを期待する。

この質問項目については部局別の集計・比較も試みた。この集計では、部局別のアンケートへの回答者が異なるので、部局別に回答数を回答者の人数で割って算出した割合で比較した。なお、教養教育機構と看護学科については、そもそも回答者の人数が少ないので、一人の回答結果により算出される割合が大きく左右されることに注意が必要である。結果は図 2.12～15 に示す通りである。図 2.12 では全体として要望の高かった「教室環境の整備」が教育学部と工学部で高いことが分かる。一方、「位置づけの明確化」については教養教育機構と看護学科で高いが、上述のように回答者数が少ないので確定的とは言えず、その他は人文学部を除いて 20%前後である。図 2.14 の「授業事例集」の要望は教育学部と看護学科で高く医学部で低くなっている。同図の「人的な授業支援」は看護学科、教育学部、工学部の順に高く、医学部が低くなっている。「経済的な授業支援」は教育学部、工学部の順に高く、医学で低くなっている。これらの要因や背景についての考察は推測の部分が多くなるため、個別の事情をよく把握されている各部局に委ねたい。



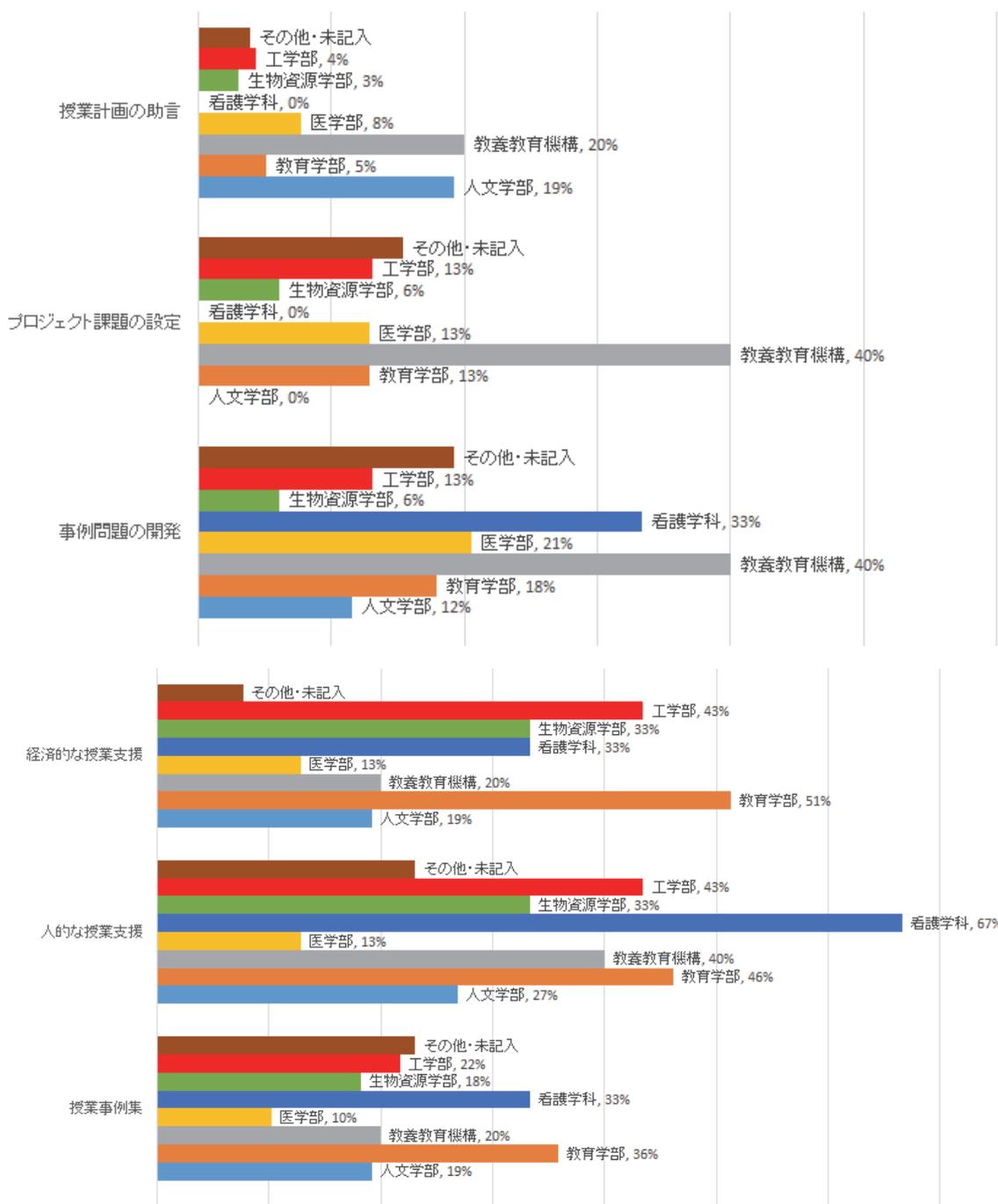
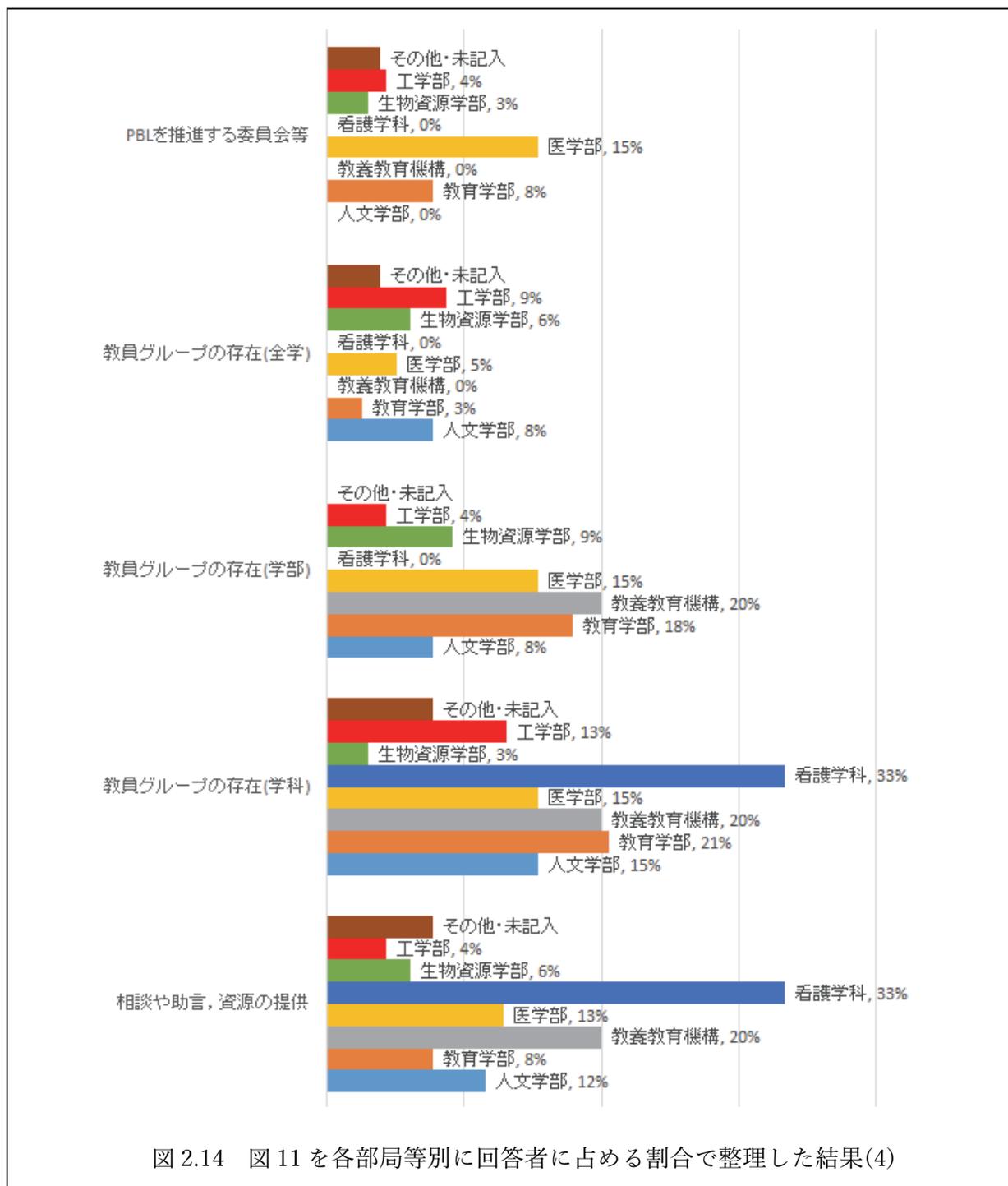


図 2.13 図 11 を各部局等別に回答者に占める割合で整理した結果(2)

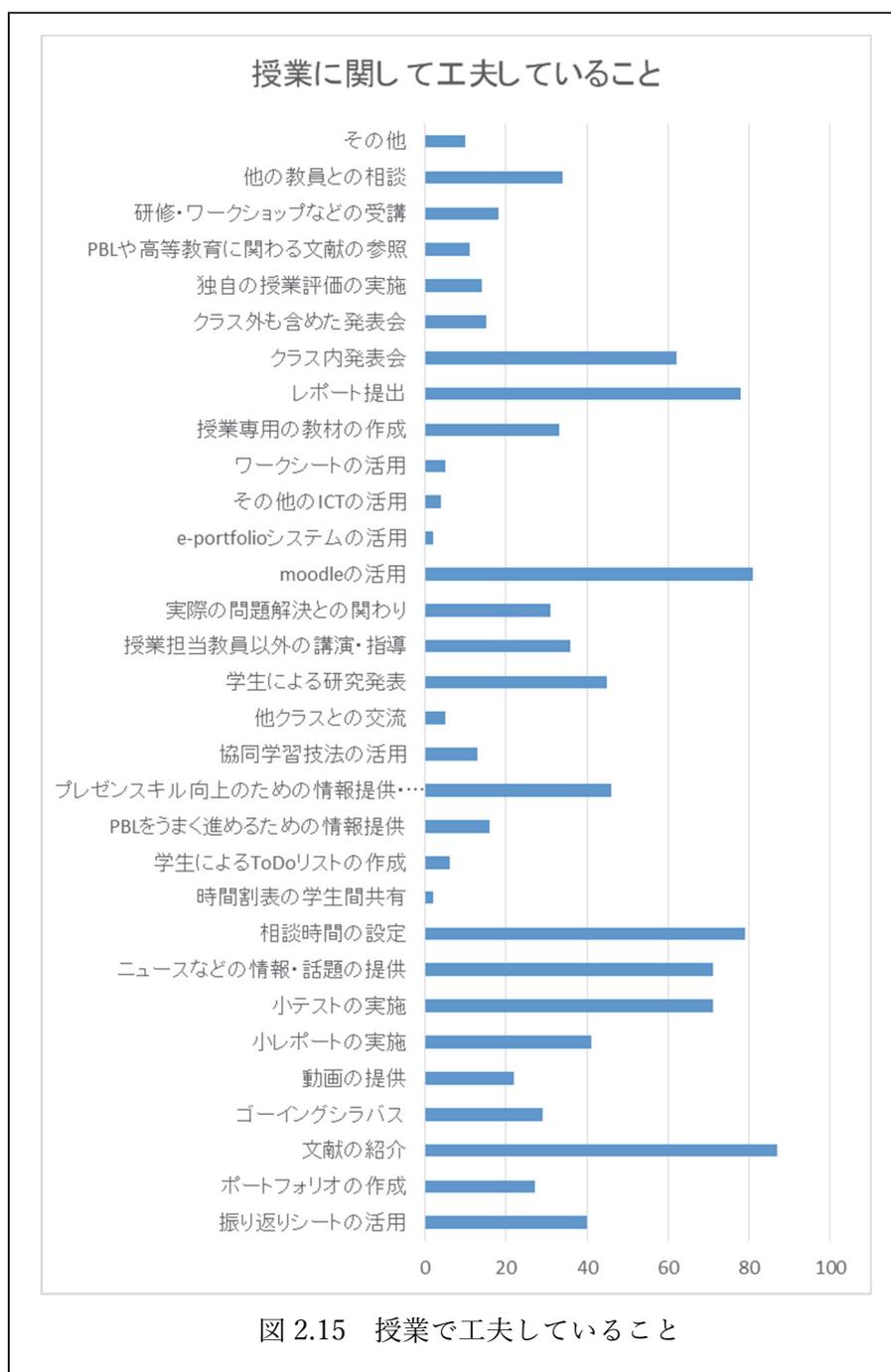


2.1.6 授業に関して工夫していること

最後に PBL の実施に関係なく授業で工夫していることを複数選択可で尋ねた結果を図 2.15 に示す。

全体として、「文献の紹介」、「相談時間の設定」、「Moodle の活用」、「レポート提出」、次いで「ニュースなどの情報・話題の提供」、「小テストの実施」、「クラス内発表会」の回答数が多かった。このうち、Moodle の活用は三重大学として特徴的なことと考えられる。さらに図 2.15 を PBL の実施の有無に分けて整理したものが図 2.16 である。実施の有無で回答が大きく変わるものをピックアップすると、当然で

はあるが「クラス内発表会」と「学生による研究発表」などが PBL 実施有のグループで多く、逆に「小テスト」は PBL 実施無のグループが多い。ある程度予測された結果であり、ここではむしろ両グループ間に差がなく回答の多い「Moodle の活用」に注目したい。この結果から PBL の実施していない教員の授業でも Moodle の利用は進んでいると読み取れるので、PBL の新たな導入にあたって Moodle などの e-ラーニングシステムをうまく活用していくことが PBL 授業の拡大に有効な方策となるかもしれない。



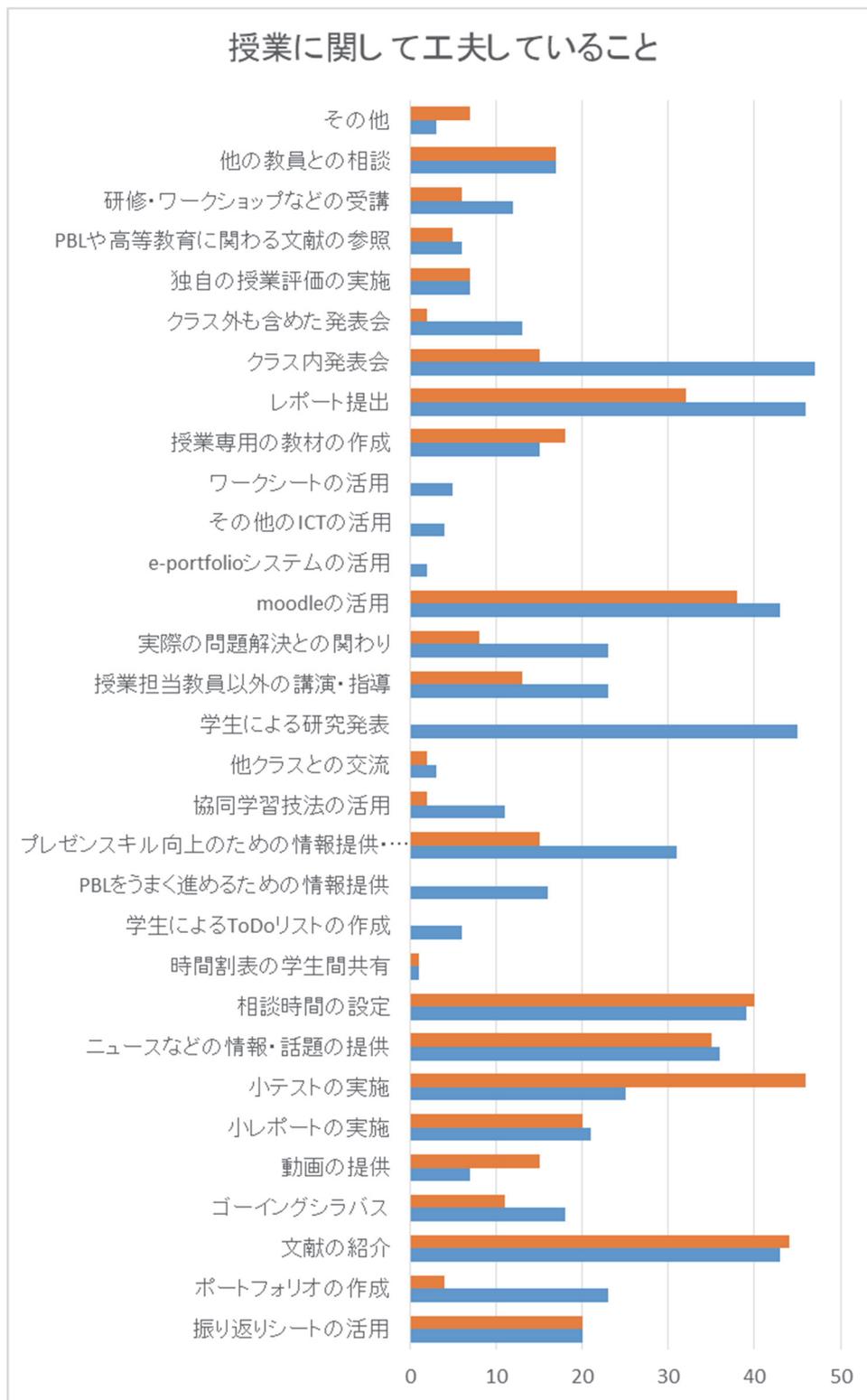


図 2.16 授業で工夫していること
(水色:PBL 実施グループ, 橙色:PBL 未実施グループ)

2.1.7 カテゴリーデータに関する総括

全教員対象のアンケートのうち、カテゴリーデータの分析から読み取れた内容を要約する。まず、回答者の分布については、構成人数を考慮すれば所属もほぼ均等であり、幅広い経験年数の回答が得られたと考えられる。PBL を現在授業に取り入れている教員（実施グループ）は回答者のほぼ半数であり、教員経験年数 15～25 年の階層で実施率が高いことがわかった。PBL を現在授業に取り入れていない教員（未実施グループ）も回答者のほぼ半数であり、

- 着任 5 年以下の階層で未実施が多い
- 約 8 割が「PBL に関心があり」、半数近くが「やってみたい」と回答
- 着任 5 年未満では 6 割以上が「やってみたい」と回答
- 始めるための要件としては事例集と人的・経済的支援の項目が高い

などの特徴が読み取れた。

また PBL の充実のために求められているサポートとしても「授業事例集」と「人的・経済的支援」の要求が高く、それ以外では「教室環境の整備」と「位置づけの明確化」が望まれている。各項目の分析結果で述べたことの繰り返しになるが、「授業事例集」の要望については内外の成功事例の情報を積極的に収集し FD 活動などを通じて提供すること等が解決策として考えられる。「授業支援」に関しては予算以外の対応策として学生間のピア評価の活用など授業の実施方法(テクニック)なども解決の一助となる可能性がある。「教室環境の整備」はパソコンの必携化に合わせて多様な形態の授業に対応できる教室を整備することが望まれている。また「位置づけの明確化」に関しては、授業事例集と共に PBL のあり方に関して全学の教員間の共通認識が形成していくことが必要である。

授業で工夫している点については、三重大大学の一つの特徴として PBL の実施の有無に関係なく Moodle の活用が浸透していることが読み取れた。これは、PBL 授業の拡大や上記の懸案事項を解決するための鍵となるかもしれない。

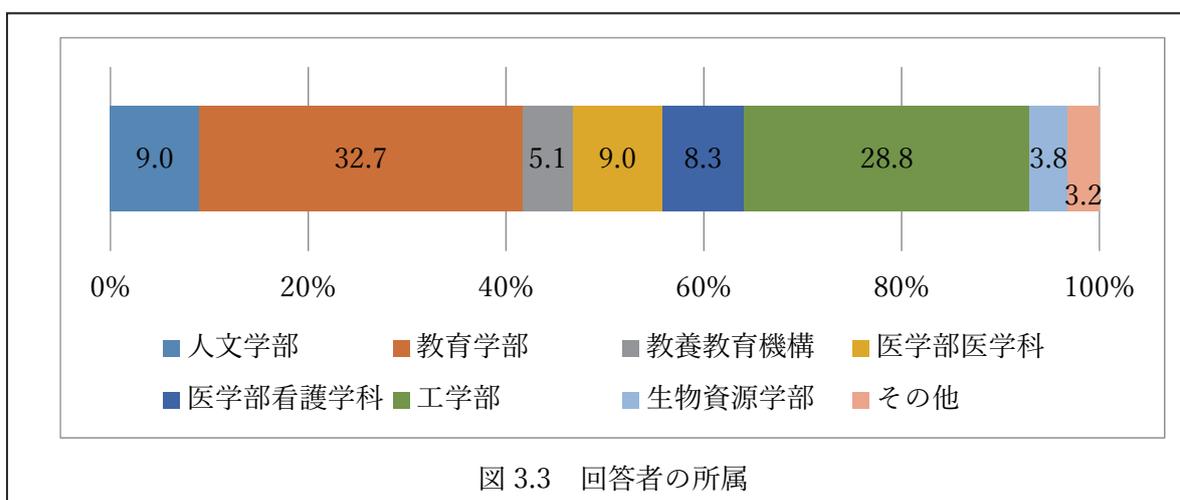
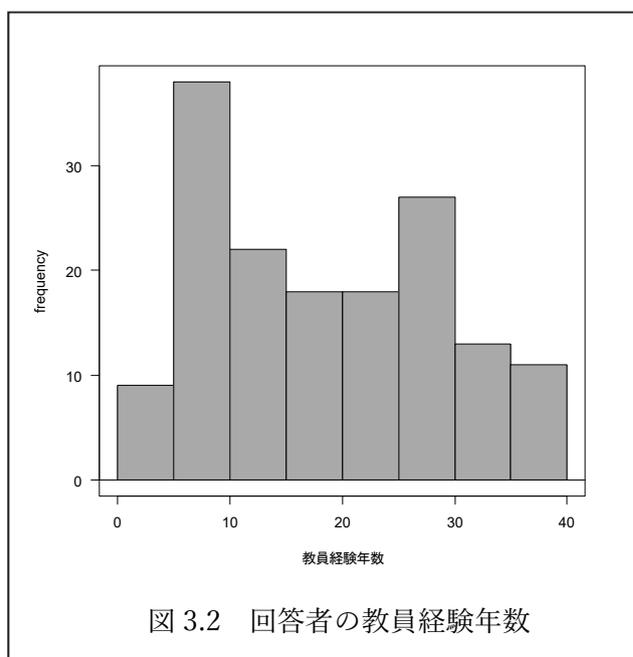
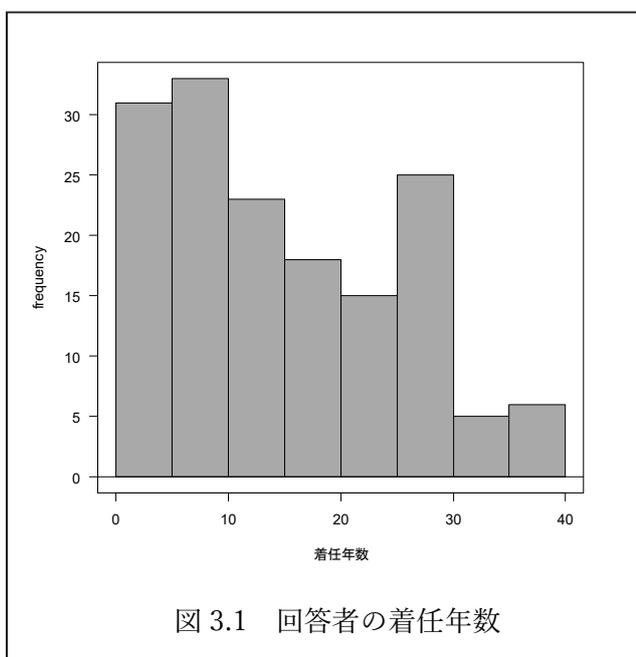
3. (PBL 授業実施教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査の分析結果

3.1 カテゴリーデータに関する分析

3.1.1 回答者の着任年数, 教員経験年数と所属の分布

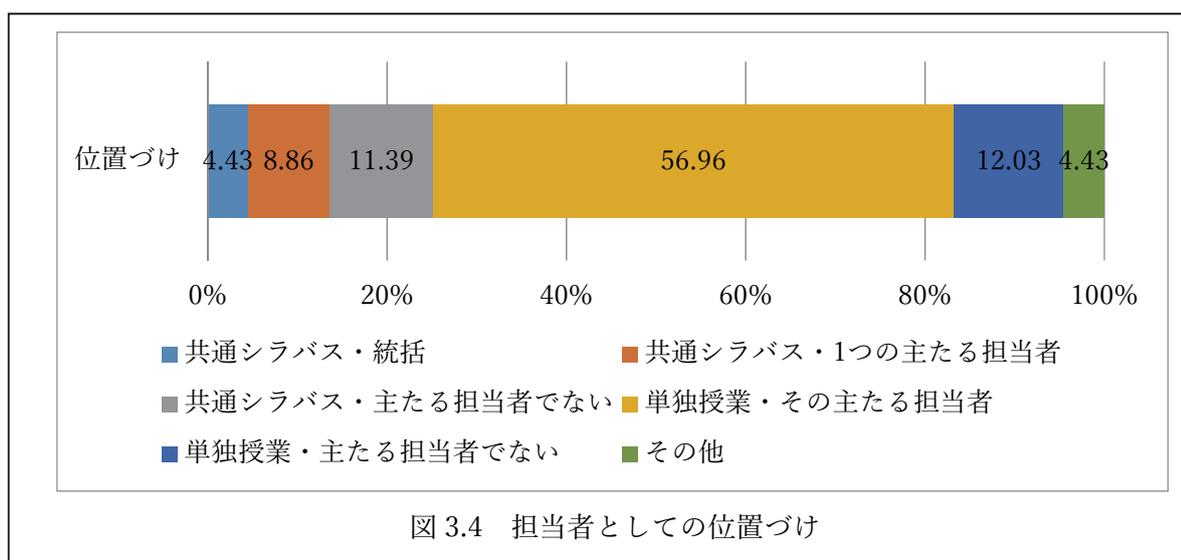
有効回答 156 件の回答者の着任年数と教員経験年数の分布をまとめたものが図 3.1, 図 3.2 である。ただし、ここでのデータは授業ごとに回答を求めているため、回答者の重複があることに注意が必要である(回答にあたっては、任意で回答者の氏名の回答を求めたがその回答がないものもあるため、重複データの整理は行えなかった)。この図から、着任年数は右肩下がりとなっているが、25~30 年の層のみが飛び出している様相が見られる。一方、経験年数も右肩下がりとなっているが、25~30 年の層のみが飛び出している様相が同様に見られた。この 2 つの図において 25~30 年の層が多いことについて、元のデータを確認すると、その層の教員の一部が複数回答を行っていたため、このような結果になったようであった。

図 3.3 は回答者の所属の構成である。全教員対象のアンケートの結果と比べると、教育学部、医学部看護学科、工学部の割合が多くなっている様相が見られる。



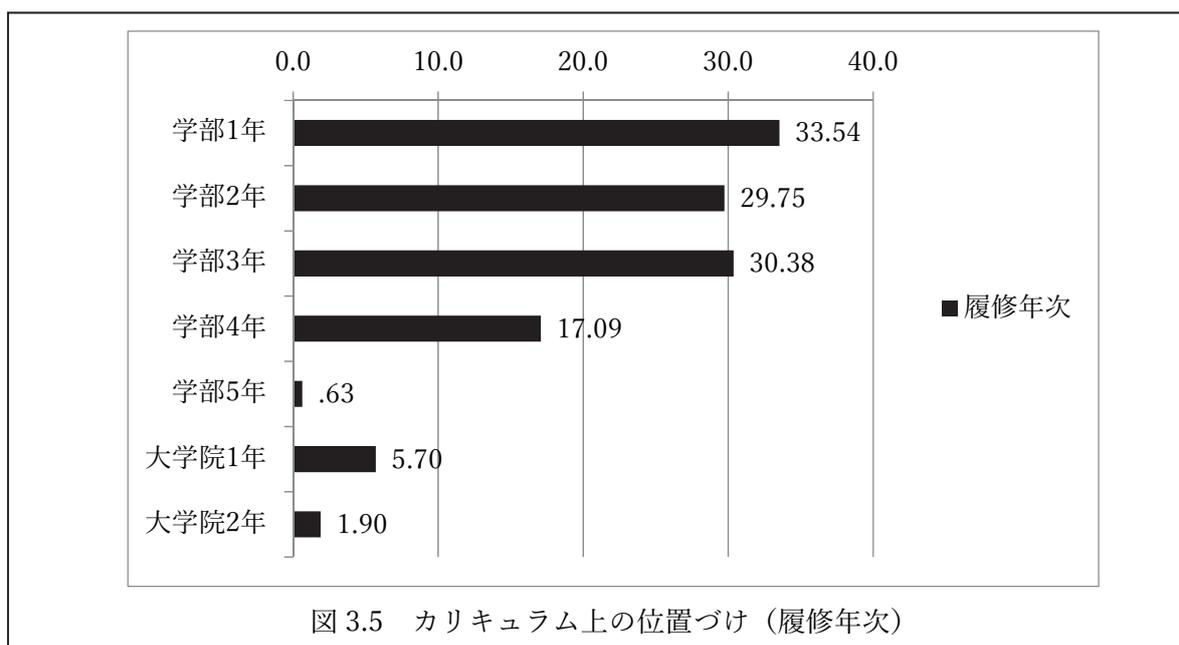
3.1.2 担当者としての位置づけについて

本アンケートでは設問 1 で、担当者としての位置づけについて尋ねている。その結果をまとめたものが図 3.4 である。図 3.4 をみる限り、本アンケートに回答した者は、(共通シラバスで複数コマ開講されている授業ではなく) 単独の授業で、その主たる担当者である立場である者が多いことがうかがえる。すなわち、制度的に行われている授業というよりは、個人が担当する授業の中で、PBL を取り入れている者から多くの回答が得られたということが考えられる。

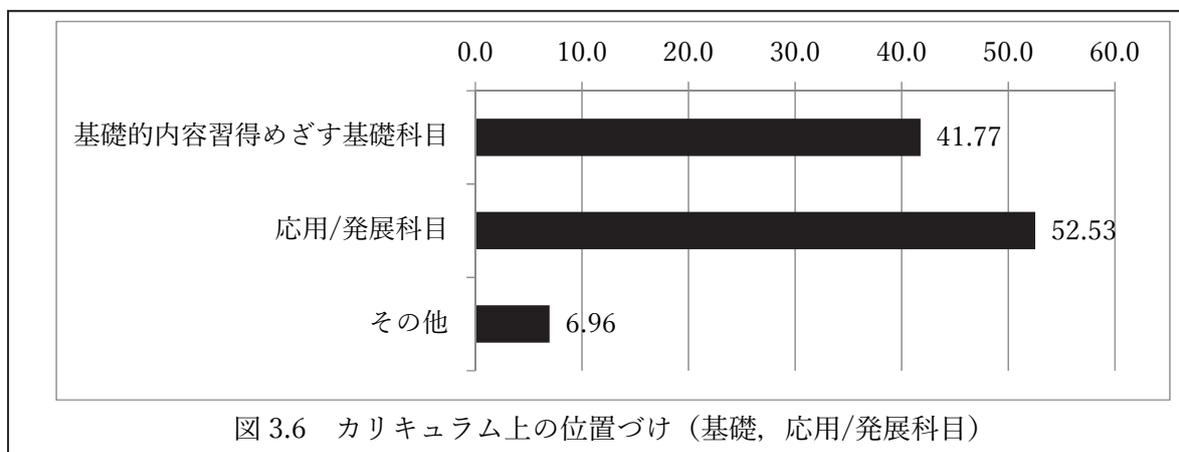


3.1.3 カリキュラム上の位置づけについて

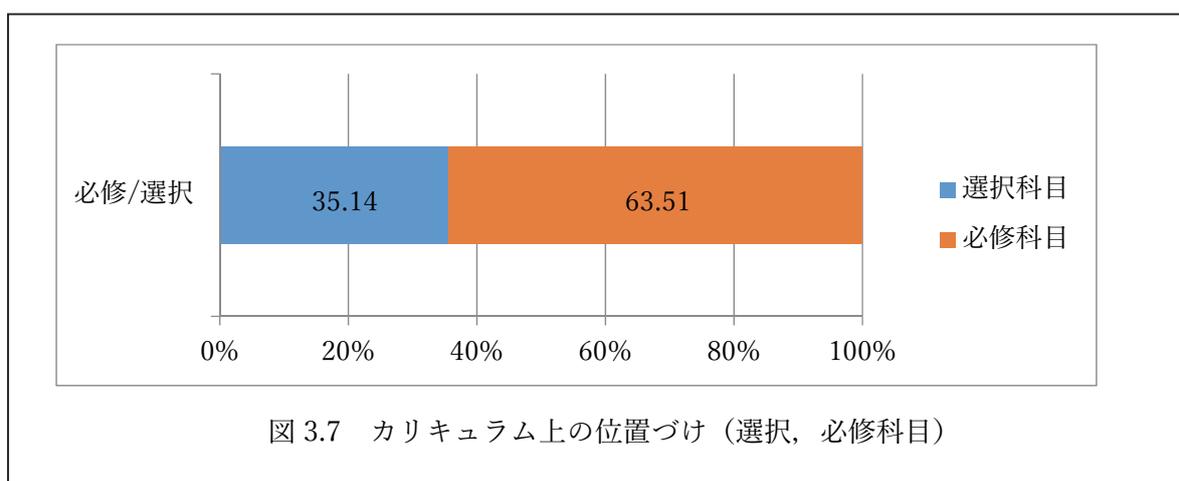
本アンケートの設問 2 では、カリキュラム上の位置づけを尋ねている。まず、履修年度についての結果をまとめたものが図 3.5 である。図 3.5 をみる限り、今回の回答においては、1 年次から 3 年次までを対象としたものが一定数あった一方、4 年次を対象としたものはそれよりも若干少ないようであった。これは、4 年次で受講することを対象とした授業自体が少ないことによるのではないかと考えられる。



続いて、基礎科目であるか、それとも応用/発展科目であるか（またはその他）について尋ねた結果をまとめたものが図 3.6 である。図 3.6 をみる限り、若干、応用/発展科目の割合が高いが、その差はあまり大きくないように思われる。ここからは基礎科目においても、PBL が取り入れられている様相がうかがえる。

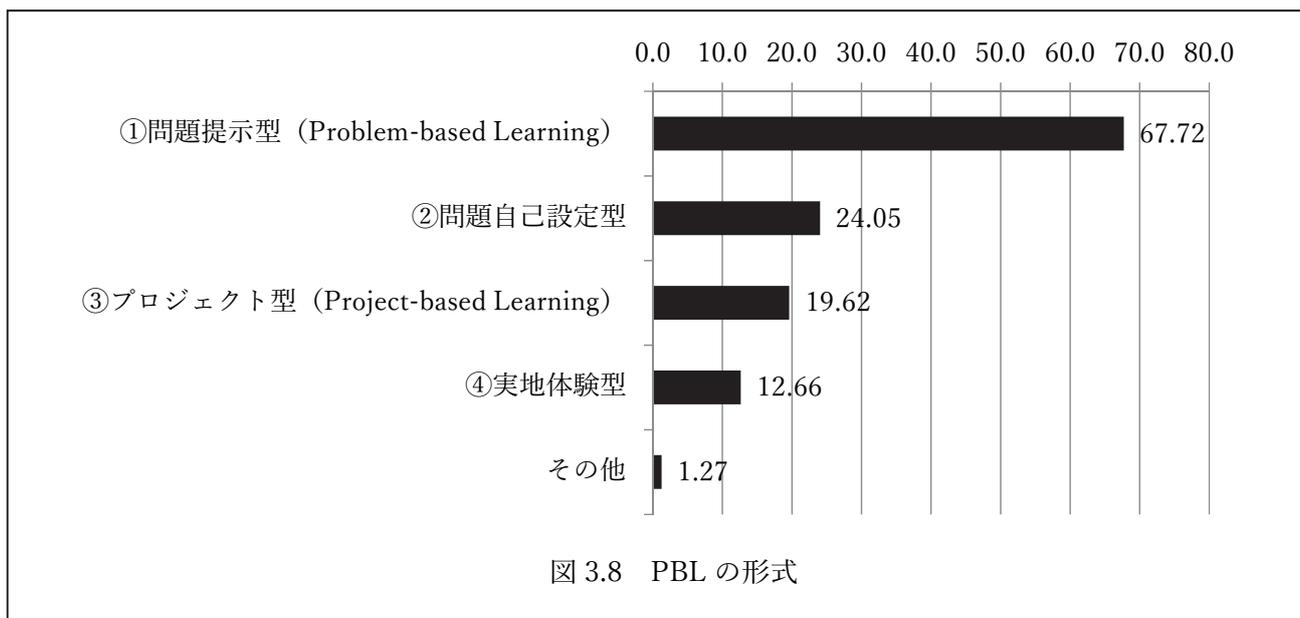


選択科目であるか、それとも必修科目であるかについて尋ねた結果をまとめたものが図 3.7 である。図 3.7 をみる限り、選択科目よりも必修科目の割合が多い様相が見られる。このことは、PBL を受けたい学生だけを対象とした授業だけではなく、特定のコースの学生すべてを対象にした PBL も相当数実施されているということである。



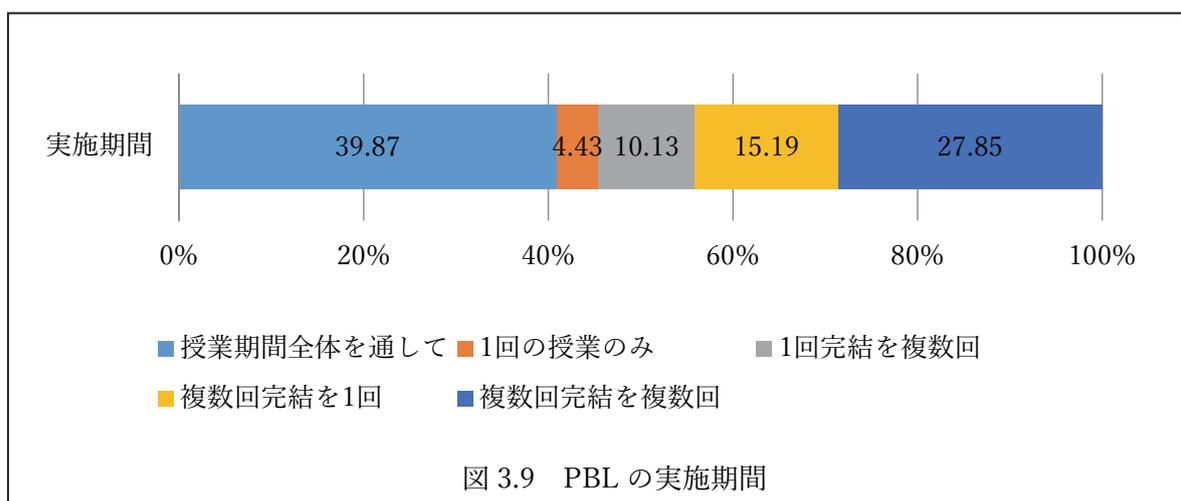
3.1.4 PBL 形式について

本アンケートの設問 3 では、PBL 形式について尋ねている。その結果をまとめたものが図 3.8 である。図 3.8 をみる限り、今回の回答においては、①問題提示型(Problem-based Learning)の割合が 7 割弱と相当数を占めた。現状の三重大学では、このような問題提示型の PBL が多く取り入れられているということであろう。



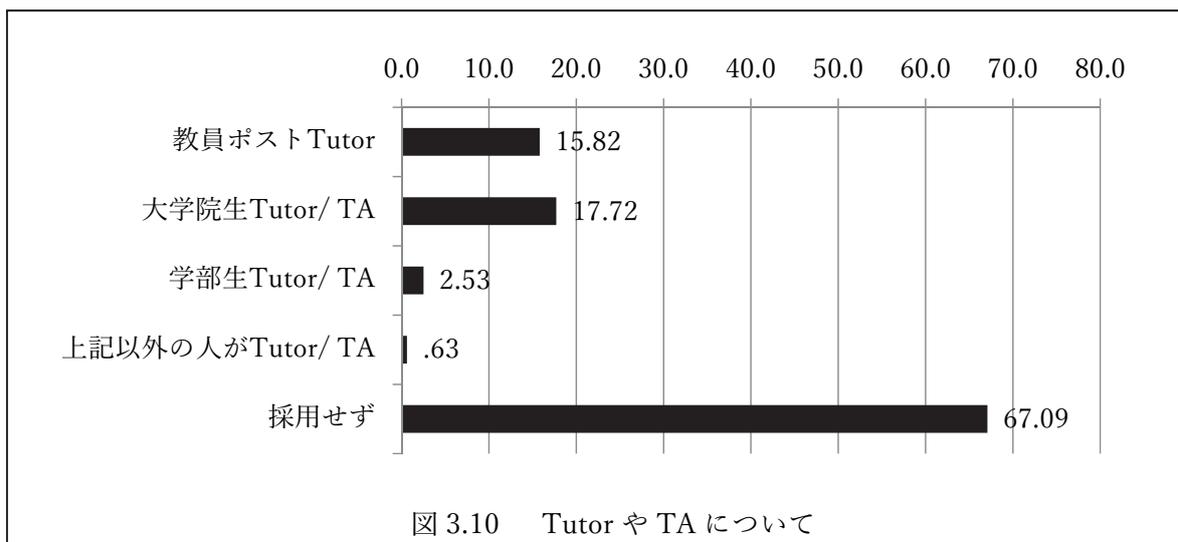
3.1.5 PBL の実施期間について

本アンケートの設問 4 では、PBL の実施期間について尋ねている。その結果をまとめたものが図 3.9 である。図 3.9 をみる限り、授業期間全体を通して行っているものが多く、次いで、複数回完結を複数回行っているというものが多かった。これらはいずれも授業期間の中でたくさん PBL を実施しているということであり、PBL を取り入れた授業としては、そのようなスタイルのものが三重大学では多いのかもしれない。



3.1.6 Tutor や TA について

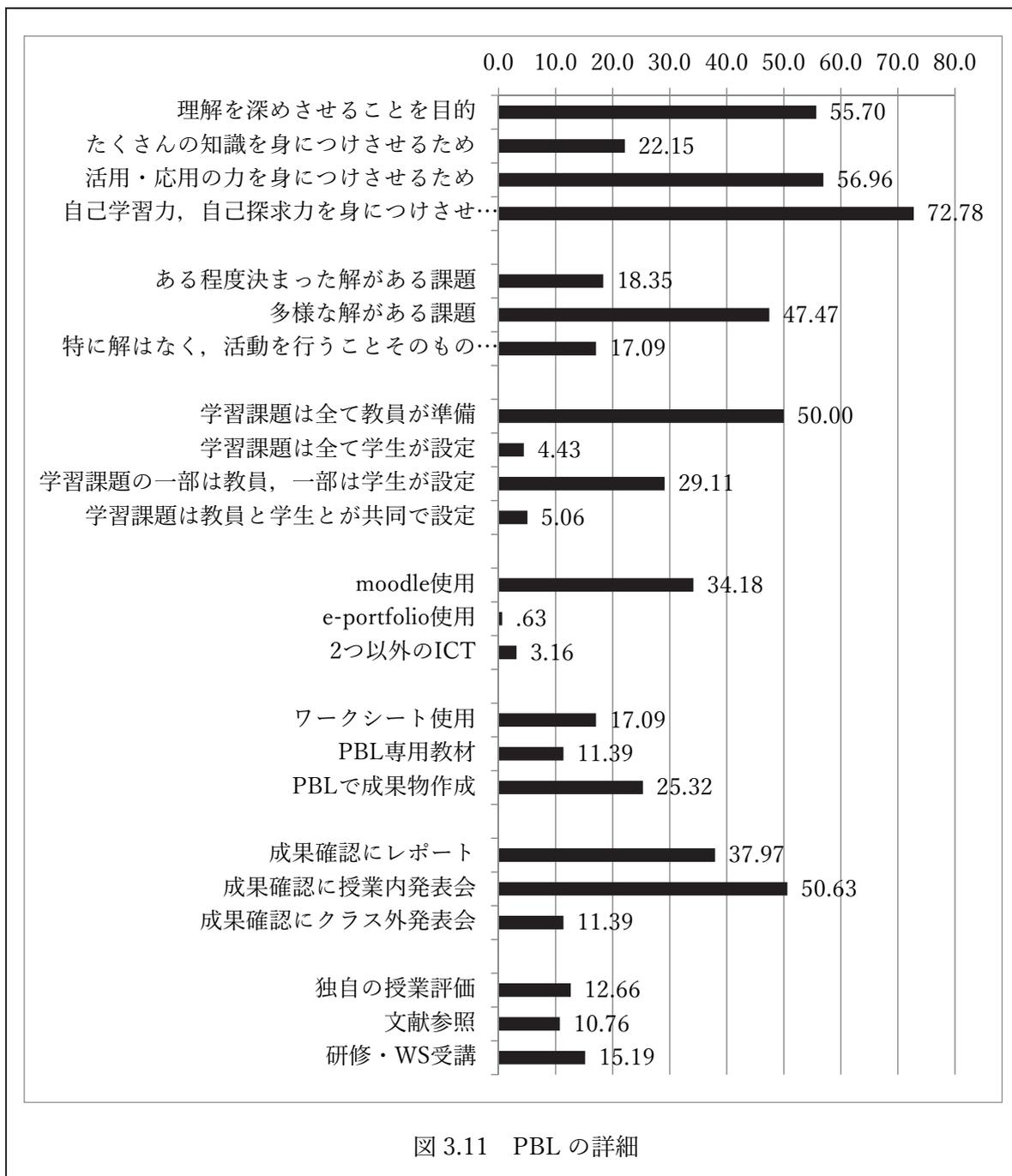
本アンケートの設問 5 では、Tutor や TA について尋ねている。Tutor や TA についてその採用状況をまとめたものが図 3.10 である。採用しないものももっとも多く、教員ポストの Tutor と大学院生の Tutor/TA の採用がともに 15%程度という結果であった。採用しないものが非常に多かったが、これがどのような理由によるものなのかは、今後検討を行う余地がある。



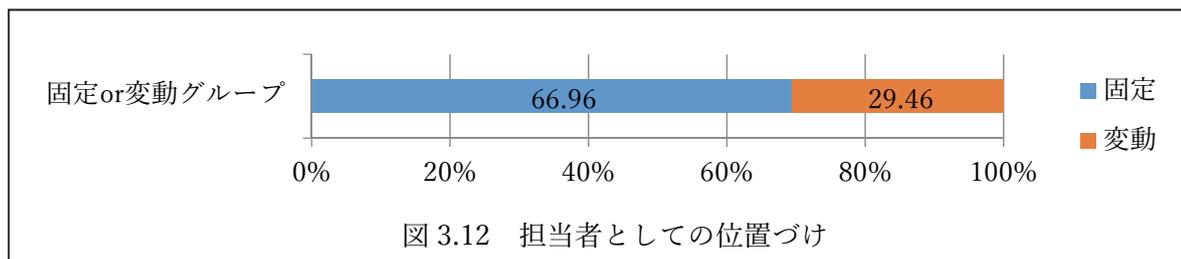
3.1.7 PBL の詳細について

本アンケートの設問6では、PBLの詳細について尋ねている。その結果をまとめたものが図3.11である。そのうち、まず、PBLで目的とするものについては、たくさんの知識を身につけさせるというのは少なく、理解を深める、活用・応用の力を身につけさせる、自己学習力・自己探求力を身につけさせるといったものが多いことが示された。次に、どのような課題を用いているかについては、多様な解がある課題が用いられている割合が最も多かった。続いて、学習課題を誰が準備するかということに関しては、最も多かったのがすべて教員が準備するというもので半数がそのようであったが、次いで多かったのが一部を学生、一部を教員が設定するというものであった。ICTにかかわるものとしては、moodle

の利用が1/3程度あった。教材としては、ワークシート使用、成果物作成ということがいくらか行われているようであった。成果確認としては、最も多かったのが授業内発表で約半数であり、レポートがそれに次いで4割弱であった。独自の授業評価を行ったり、文献を参照したり、研修やワークショップを受講するという事はわずかながら行われているという様子であった。



グループ編成が、固定グループもしくは変動グループかについては、固定グループが 2/3 と変動グループよりも多い割合であった。やはり PBL は長期間の問題解決・プロジェクト活動を行うということが多いため、そのようになったのではないかと考えられる。



グループサイズについては、3～5名が最も多く、次いで6～10名であった。小グループでの学習においては、3名や4名で行われることが多いため、ここでも3～5名というグループが最も多かったと考えられる。一方で、小グループでの学習としてはあまり行われない6～10名という回答も一定数見られた。これは、ある程度の規模の問題解決・プロジェクト活動を行うにはそれに見合う人手が必要になるということなどが影響しているのかもしれない。また、わずかながら1名という回答も得られたが、グループでの活動を伴わない教員との1対1のPBLが、グループで行うPBLとどのように効果が異なるかについては、今後、検討の余地があるであろう。

評価方法についてまとめたのが、図3.14である。評価方法としては、レポート等の提出が最も多く、続いて、出席点、パフォーマンス評価、観察評価が多いという様相が見られた。

PBLを始めたきっかけについてまとめたものが図3.15である。そこでは、PBLを始めたきっかけの約半数が、自らの意思で開始しているという結果が見られている。

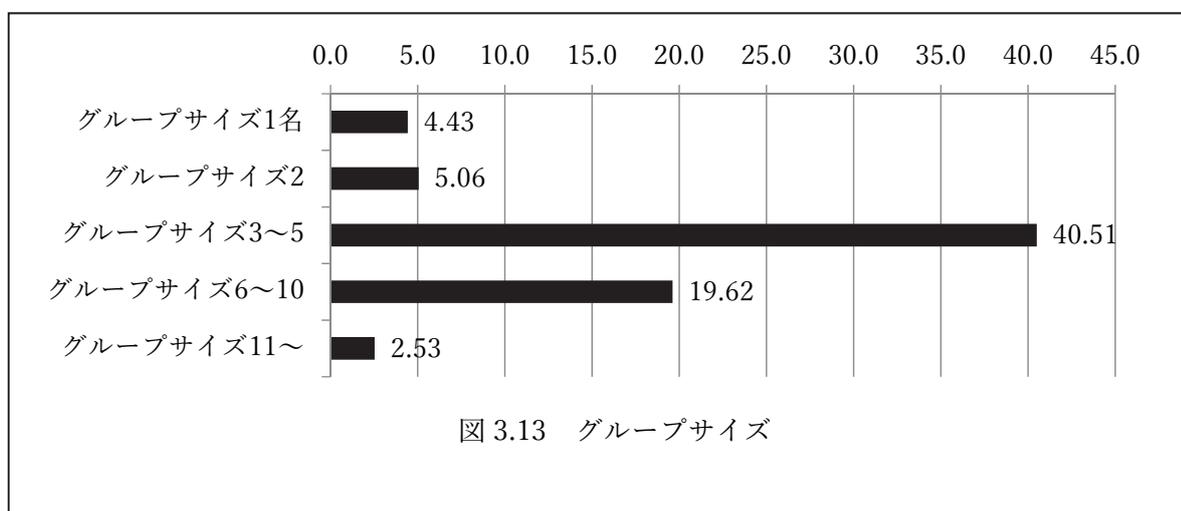


図 3.13 グループサイズ

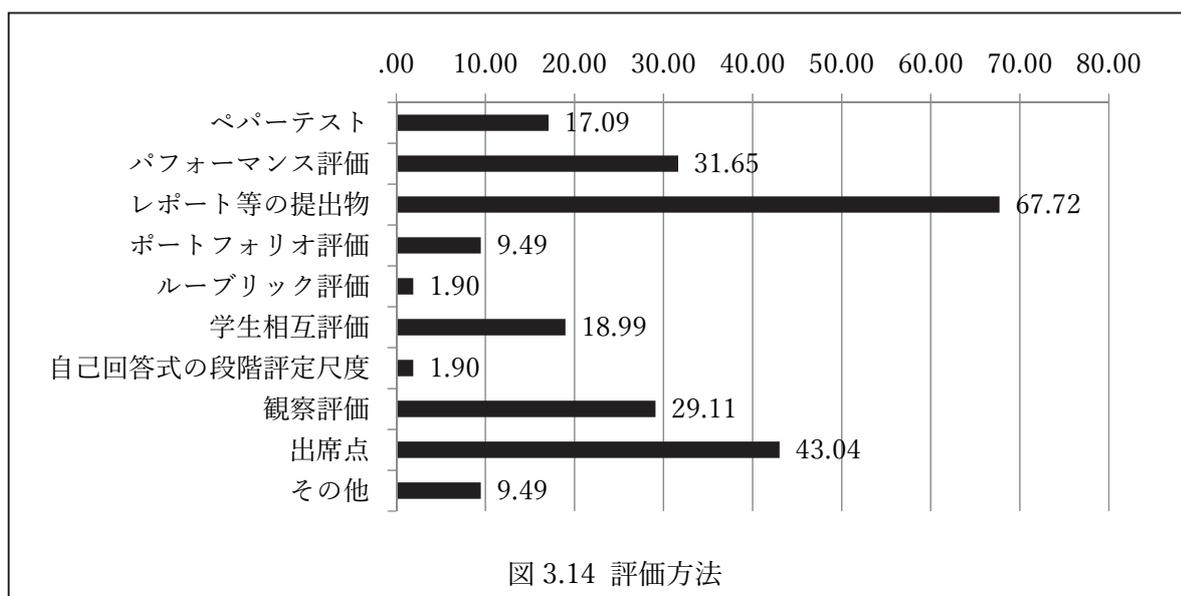
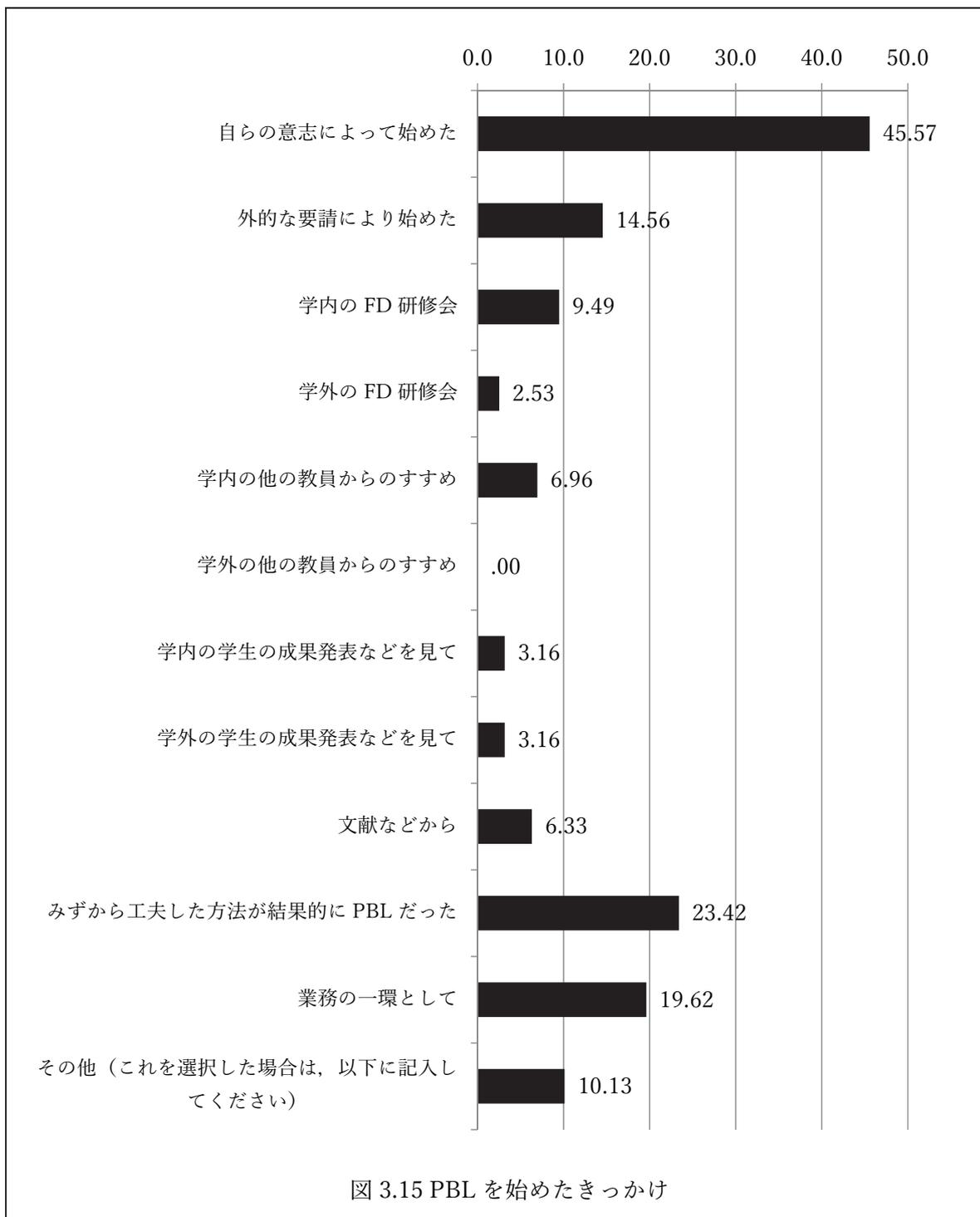
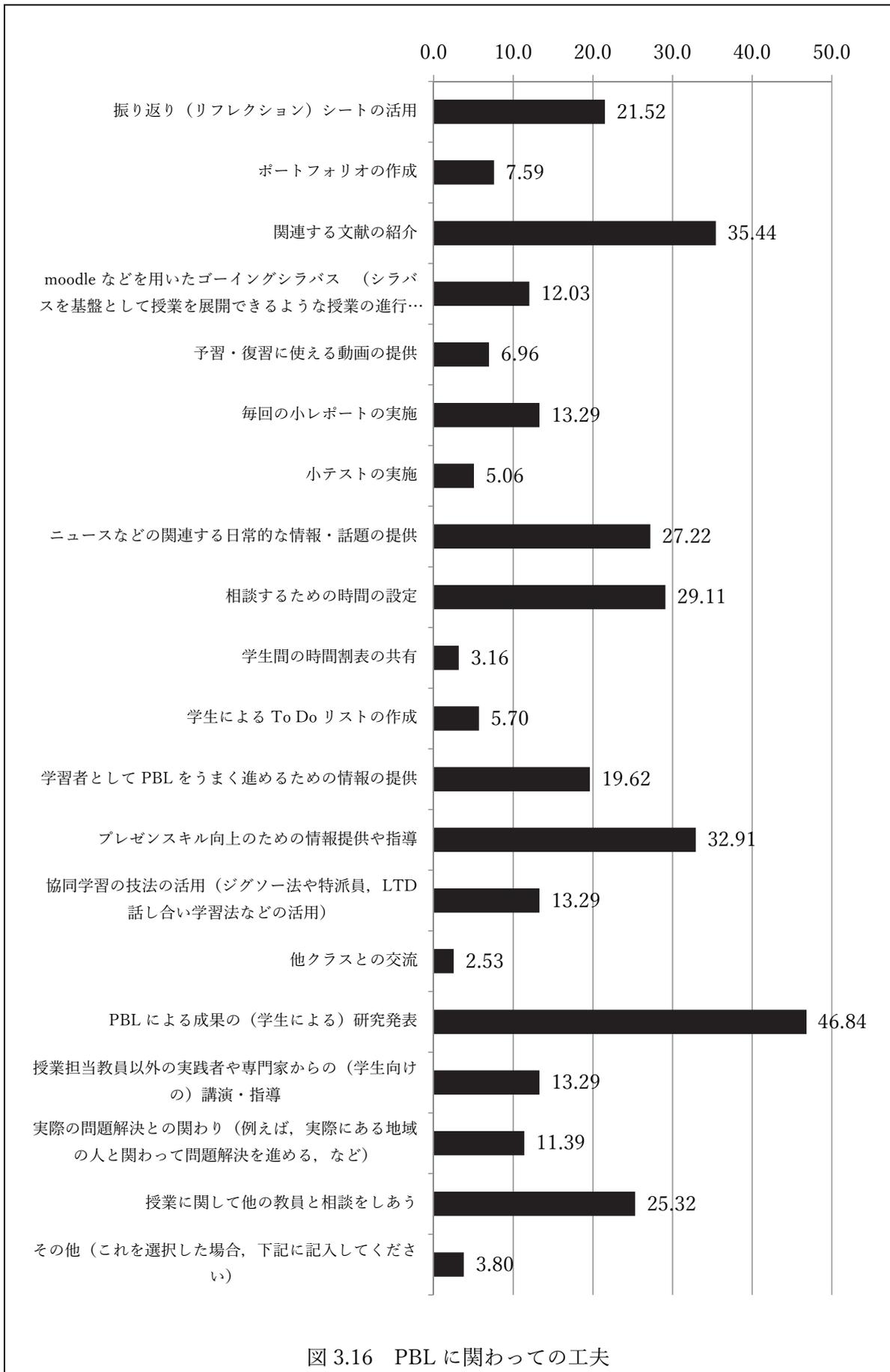


図 3.14 評価方法



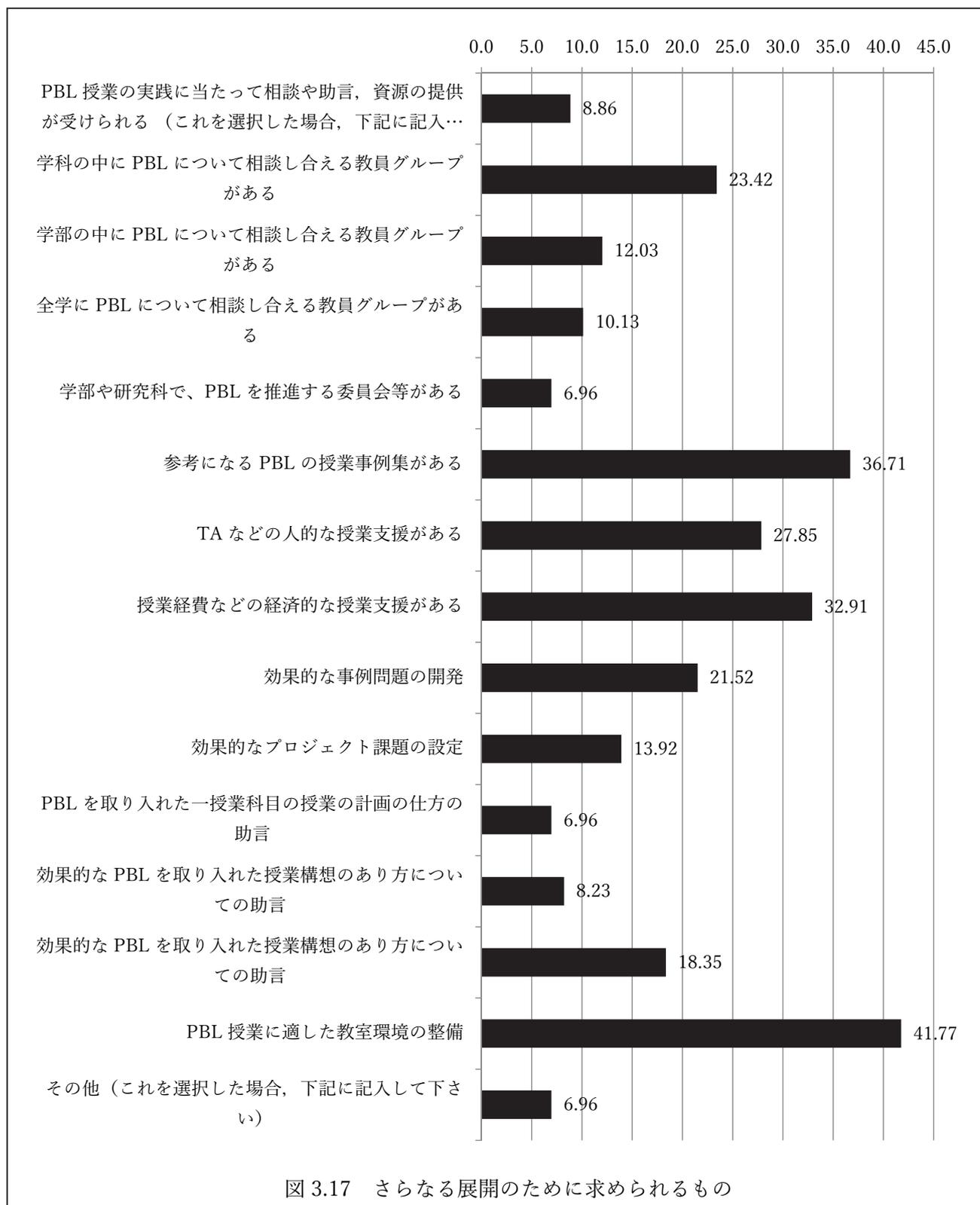
3.1.8 PBL の工夫について

本アンケートの設問 7 では、PBL の実施に関わっての工夫について尋ねている。その結果をまとめたものが図 3.16 である。行われている工夫で多かったものを挙げると、リフレクションシート活用、関連文献の紹介、日常的な情報の紹介、相談のための時間の設定、協同学習の技法の活用、PBL 成果の研究発表、他の教員と相談するというものであった。



3.1.9 さらなる展開のために求められるものについて

本アンケートの設問 8 では、PBL のさらなる展開のために求められるものについて尋ねている。その結果をまとめたものが図 3.17 である。さらなる展開のために求められるものとしてそこで多く挙げられたものは、授業事例集、人的・経済的支援、教室環境整備といったものであった。



3.2 クロス集計

調査項目において「軸となるような項目」と考えられた項目と、他の項目とのクロス集計を行うことでアンケート結果のさらなる検討を行った。軸となる項目として取り上げたものは、「基礎科目・応用科目」「選択科目・必修科目」「実地体験型 PBL かそうでないか」「PBL を”自らの意志によって始めた”か」「PBL を”業務の一部として始めた”か」である。

ここではそのうち特徴的な様相が見られたものについて、紹介する。

3.2.1 基礎科目・応用科目の違い

		④実地体験型		合計	
		0	1		
基礎or応用	基礎科目	度数	55	3	58
		%	94.8%	5.2%	100.0%
	応用科目	度数	61	14	75
		%	81.3%	18.7%	100.0%
合計		度数	116	17	133
		%	87.2%	12.8%	100.0%

応用科目の方が実地体験型の割合が多いようであった。

		活用・応用の力を身につけさせるため		合計	
		0	1		
基礎or応用	基礎科目	度数	32	26	58
		%	55.2%	44.8%	100.0%
	応用科目	度数	22	53	75
		%	29.3%	70.7%	100.0%
合計		度数	54	79	133
		%	40.6%	59.4%	100.0%

応用科目の方が活用応用の力を身に付けるために PBL を行っていると考えられている割合が多いようであった。

		学習課題の一部は教員、一部は学生が設定		合計	
		0	1		
基礎or応用	基礎科目	度数	46	12	58
		%	79.3%	20.7%	100.0%
	応用科目	度数	49	26	75
		%	65.3%	34.7%	100.0%
合計		度数	95	38	133
		%	71.4%	28.6%	100.0%

応用科目の方が、学習課題の一部を教員が、一部は学生が設定している割合が多いようであった。

		特に解はなく、活動を行うことその ものが目的		
		0	1	合計
基礎or応用 基礎科目	度数	44	14	58
	%	75.9%	24.1%	100.0%
応用科目	度数	66	9	75
	%	88.0%	12.0%	100.0%
合計	度数	110	23	133
	%	82.7%	17.3%	100.0%

基礎科目の方が、特に解はなく、活動を行うことそのものが目的の授業である割合が多いようであった。

		ワークシート使用		
		0	1	合計
基礎or応用 基礎科目	度数	54	4	58
	%	93.1%	6.9%	100.0%
応用科目	度数	57	18	75
	%	76.0%	24.0%	100.0%
合計	度数	111	22	133
	%	83.5%	16.5%	100.0%

応用科目の方が、ワークシートを利用している割合が多いようであった。

		成果確認に授業内発表会		
		0	1	合計
基礎or応用 基礎科目	度数	33	25	58
	%	56.9%	43.1%	100.0%
応用科目	度数	30	45	75
	%	40.0%	60.0%	100.0%
合計	度数	63	70	133
	%	47.4%	52.6%	100.0%

応用科目の方が、成果確認に授業内発表会を行っている割合が多いようであった。

		ペーパーテスト		
		0	1	合計
基礎or応用 基礎科目	度数	42	16	58
	%	72.4%	27.6%	100.0%
応用科目	度数	67	8	75
	%	89.3%	10.7%	100.0%
合計	度数	109	24	133
	%	82.0%	18.0%	100.0%

基礎科目の方が、ペーパーテストを用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		学内の学生の成果発表などを見て		合計	
		0	1		
基礎or応用	基礎科目	度数	54	4	58
		%	93.1%	6.9%	100.0%
	応用科目	度数	75	0	75
		%	100.0%	0.0%	100.0%
合計		度数	129	4	133
		%	97.0%	3.0%	100.0%

基礎科目の方が、学内の学生の成果発表などを見て PBL を始めるに至った割合が多いようであった。

		みずから工夫した方法が結果的に PL だった		合計	
		0	1		
基礎or応用	基礎科目	度数	50	8	58
		%	86.2%	13.8%	100.0%
	応用科目	度数	54	21	75
		%	72.0%	28.0%	100.0%
合計		度数	104	29	133
		%	78.2%	21.8%	100.0%

応用科目の方が、みずから工夫した方法が結果的に PBL だった割合が多いようであった。

3.2.2 選択科目・必修科目の違い

		①問題提示型 (Problem-based Learning)		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	19	32	51
		%	37.3%	62.7%	100.0%
	必修	度数	21	72	93
		%	22.6%	77.4%	100.0%
合計		度数	40	104	144
		%	27.8%	72.2%	100.0%

必修科目の方が、問題提示型 (Problem-based Learning) である割合が多いようであった。

		教員ポストTutor		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	48	3	51
		%	94.1%	5.9%	100.0%
	必修	度数	71	22	93
		%	76.3%	23.7%	100.0%
合計		度数	119	25	144
		%	82.6%	17.4%	100.0%

必修科目の方が、教員ポストの人間が Tutor としてついている割合が多いようであった。

		PBL専用教材		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	50	1	51
		%	98.0%	2.0%	100.0%
必修	選択	度数	78	15	93
		%	83.9%	16.1%	100.0%
合計	選択	度数	128	16	144
		%	88.9%	11.1%	100.0%

必修科目の方が、PBL専用教材を使っている割合が多いようであった。

		成果確認にクラス外発表会		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	41	10	51
		%	80.4%	19.6%	100.0%
必修	選択	度数	86	7	93
		%	92.5%	7.5%	100.0%
合計	選択	度数	127	17	144
		%	88.2%	11.8%	100.0%

選択科目の方が、成果確認にクラス外発表会を行っている割合が多いようであった。

		研修・WS受講		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	47	4	51
		%	92.2%	7.8%	100.0%
必修	選択	度数	75	18	93
		%	80.6%	19.4%	100.0%
合計	選択	度数	122	22	144
		%	84.7%	15.3%	100.0%

必修科目の方が、研修やワークショップの受講を行っている割合が多いようであった。

		ポートフォリオ評価		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	50	1	51
		%	98.0%	2.0%	100.0%
必修	選択	度数	80	13	93
		%	86.0%	14.0%	100.0%
合計	選択	度数	130	14	144
		%	90.3%	9.7%	100.0%

必修科目の方が、ポートフォリオ評価を行っている割合が多いようであった。

		業務の一環として		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	46	5	51
		%	90.2%	9.8%	100.0%
	必修	度数	68	25	93
		%	73.1%	26.9%	100.0%
合計		度数	114	30	144
		%	79.2%	20.8%	100.0%

必修科目の方が、業務の一環としてPBLを行っている割合が多いようであった。

		授業担当教員以外の実践者や専門家からの（学生向けの）講演・指導		合計	
		0	1		
選択or必修	選択	度数	39	12	51
		%	76.5%	23.5%	100.0%
	必修	度数	84	9	93
		%	90.3%	9.7%	100.0%
合計		度数	123	21	144
		%	85.4%	14.6%	100.0%

選択科目の方が、授業担当教員以外の実践者や専門家からの（学生向けの）講演・指導を行っている割合が多いようであった。

3.2.3 実地体験型PBLかそうでないかの違い

		ペーパーテスト		合計	
		0	1		
PBL形式実地	実地体験型	度数	20	0	20
		%	100.0%	0.0%	100.0%
	実地なし	度数	105	26	131
		%	80.2%	19.8%	100.0%
合計		度数	125	26	151
		%	82.8%	17.2%	100.0%

実地体験型PBLではないものの方が、ペーパーテストを用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		外的な要請により始めた		合計	
		0	1		
PBL形式実地	実地体験型	度数	14	6	20
		%	70.0%	30.0%	100.0%
	実地なし	度数	114	17	131
		%	87.0%	13.0%	100.0%
合計		度数	128	23	151
		%	84.8%	15.2%	100.0%

実地体験型PBLの方が、外的な要請によりPBLを始めた割合が多いようであった。

				学外の学生の成果発表などを見て		
				0	1	合計
PBL形式実 地	実地体験型	度数		17	3	20
		%		85.0%	15.0%	100.0%
	実地なし	度数		129	2	131
		%		98.5%	1.5%	100.0%
合計		度数		146	5	151
		%		96.7%	3.3%	100.0%

実地体験型 PBL の方が，学外の学生の成果発表などを見て PBL を始めた割合が多いようであった。

				学習課題の一部は教員，一部は学生 が設定		
				0	1	合計
PBL形式実 地	実地体験型	度数		10	10	20
		%		50.0%	50.0%	100.0%
	実地なし	度数		95	36	131
		%		72.5%	27.5%	100.0%
合計		度数		105	46	151
		%		69.5%	30.5%	100.0%

実地体験型 PBL の方が，学習課題の一部を教員が，一部は学生が設定している割合が多いようであった。

				成果確認に授業内発表会		
				0	1	合計
PBL形式実 地	実地体験型	度数		13	7	20
		%		65.0%	35.0%	100.0%
	実地なし	度数		58	73	131
		%		44.3%	55.7%	100.0%
合計		度数		71	80	151
		%		47.0%	53.0%	100.0%

実地体験型 PBL ではないものの方が，成果確認に授業内発表会を行っている割合が多いようであった。

3.2.4 PBL を“自らの意志によって始めた”かによる違い

				理解を深めさせることを目的		
				0	1	合計
自らの意志 によって始 めた	0	度数		46 _a	40 _b	86
		%		53.5%	46.5%	100.0%
	1	度数		24 _a	48 _b	72
		%		33.3%	66.7%	100.0%
合計		度数		70	88	158
		%		44.3%	55.7%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、理解を深めさせることを目的としている割合が多いようであった。

		活用・応用の力を身につけさせるため			
		0	1	合計	
自らの意志によって始めた	0	度数	51 _a	35 _b	86
		%	59.3%	40.7%	100.0%
1		度数	17 _a	55 _b	72
		%	23.6%	76.4%	100.0%
合計		度数	68	90	158
		%	43.0%	57.0%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、活用・応用の力を身につけさせるために行っている割合が多いようであった。

		ある程度決まった解がある課題			
		0	1	合計	
自らの意志によって始めた	0	度数	75 _a	11 _b	86
		%	87.2%	12.8%	100.0%
1		度数	54 _a	18 _b	72
		%	75.0%	25.0%	100.0%
合計		度数	129	29	158
		%	81.6%	18.4%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、ある程度決まった解がある課題を用いている割合が多いようであった。

		多様な解がある課題			
		0	1	合計	
自らの意志によって始めた	0	度数	52 _a	34 _b	86
		%	60.5%	39.5%	100.0%
1		度数	31 _a	41 _b	72
		%	43.1%	56.9%	100.0%
合計		度数	83	75	158
		%	52.5%	47.5%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、多様な解がある課題を用いている割合が多いようであった。

		独自の授業評価		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	79 _a	7 _a	86
		%	91.9%	8.1%	100.0%
1	度数	59 _a	13 _a	72	
	%	81.9%	18.1%	100.0%	
合計	度数	138	20	158	
	%	87.3%	12.7%	100.0%	

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、独自の授業評価を用いている割合が多いようであった。

		ペーパーテスト		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	78 _a	8 _b	86
		%	90.7%	9.3%	100.0%
1	度数	53 _a	19 _b	72	
	%	73.6%	26.4%	100.0%	
合計	度数	131	27	158	
	%	82.9%	17.1%	100.0%	

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、ペーパーテストを用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		レポート等の提出物		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	37 _a	49 _b	86
		%	43.0%	57.0%	100.0%
1	度数	14 _a	58 _b	72	
	%	19.4%	80.6%	100.0%	
合計	度数	51	107	158	
	%	32.3%	67.7%	100.0%	

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、レポート等の提出物を用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		出席点		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	40 _a	46 _b	86
		%	46.5%	53.5%	100.0%
1	度数	50 _a	22 _b	72	
	%	69.4%	30.6%	100.0%	
合計	度数	90	68	158	
	%	57.0%	43.0%	100.0%	

PBL が自らの意志によって始めたものでない方が、出席点を用いて評価を行っている割合が多いよう

であった。

		学外の FD 研修会		合計	
		0	1		
自らの意志	0	度数	86 _a	0 _b	86
によって始		%	100.0%	0.0%	100.0%
めた	1	度数	68 _a	4 _b	72
		%	94.4%	5.6%	100.0%
合計		度数	154	4	158
		%	97.5%	2.5%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、学外の FD 研修会が PBL を始めたきっかけとなっている割合が多いようであった。

		学外の学生の成果発表などを見て		合計	
		0	1		
自らの意志	0	度数	86 _a	0 _b	86
によって始		%	100.0%	0.0%	100.0%
めた	1	度数	67 _a	5 _b	72
		%	93.1%	6.9%	100.0%
合計		度数	153	5	158
		%	96.8%	3.2%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、学外の学生の成果発表などを見たことが PBL を始めたきっかけとなっている割合が多いようであった。

		文献などから		合計	
		0	1		
自らの意志	0	度数	86 _a	0 _b	86
によって始		%	100.0%	0.0%	100.0%
めた	1	度数	62 _a	10 _b	72
		%	86.1%	13.9%	100.0%
合計		度数	148	10	158
		%	93.7%	6.3%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、文献などを見たことが PBL を始めたきっかけとなっている割合が多いようであった。

		みずから工夫した方法が結果的に PBL だった		合計	
		0	1		
自らの意志	0	度数	72 _a	14 _b	86
によって始		%	83.7%	16.3%	100.0%
めた	1	度数	49 _a	23 _b	72
		%	68.1%	31.9%	100.0%
合計		度数	121	37	158
		%	76.6%	23.4%	100.0%

PBLが自らの意志によって始めたものである方が、みずから工夫した方法が結果的にPBLだった割合が多いようであった。

		業務の一環として		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	58 _a	28 _b	86
		%	67.4%	32.6%	
1		度数	69 _a	3 _b	72
		%	95.8%	4.2%	
合計		度数	127	31	158
		%	80.4%	19.6%	

PBLが自らの意志によって始めたものでない方が、業務の一環としてPBLを始めた割合が多いようであった。

		振り返り（リフレクション）シート の活用		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	73 _a	13 _b	86
		%	84.9%	15.1%	
1		度数	51 _a	21 _b	72
		%	70.8%	29.2%	
合計		度数	124	34	158
		%	78.5%	21.5%	

PBLが自らの意志によって始めたものである方が、振り返り（リフレクション）シートの活用を行っている割合が多いようであった。

		小テストの実施		合計	
		0	1		
自らの意志 によって始 めた	0	度数	85 _a	1 _b	86
		%	98.8%	1.2%	
1		度数	65 _a	7 _b	72
		%	90.3%	9.7%	
合計		度数	150	8	158
		%	94.9%	5.1%	

PBLが自らの意志によって始めたものである方が、小テストの実施を行っている割合が多いようであった。

		協同学習の技法の活用（ジグソー法 や特派員，LTD 話し合い学習法など の活用）			
		0	1	合計	
自らの意志	0	度数	79 _a	7 _b	86
によって始		%	91.9%	8.1%	100.0%
めた	1	度数	58 _a	14 _b	72
		%	80.6%	19.4%	100.0%
合計		度数	137	21	158
		%	86.7%	13.3%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、協同学習の技法の活用（ジグソー法や特派員，LTD 話し合い学習法などの活用）を行っている割合が多いようであった。

		実際の問題解決との関わり（例え ば、実際にある地域の人と関わって 問題解決を進める，など）			
		0	1	合計	
自らの意志	0	度数	80 _a	6 _a	86
によって始		%	93.0%	7.0%	100.0%
めた	1	度数	60 _a	12 _a	72
		%	83.3%	16.7%	100.0%
合計		度数	140	18	158
		%	88.6%	11.4%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものである方が、実際の問題解決との関わり（例えば、実際にある地域の人と関わって問題解決を進める，など）を行っている割合が多いようであった。

		授業に関して他の教員と相談をしあ う			
		0	1	合計	
自らの意志	0	度数	58 _a	28 _b	86
によって始		%	67.4%	32.6%	100.0%
めた	1	度数	60 _a	12 _b	72
		%	83.3%	16.7%	100.0%
合計		度数	118	40	158
		%	74.7%	25.3%	100.0%

PBL が自らの意志によって始めたものでない方が、授業に関して他の教員と相談をしあう割合が多いようであった。

3.2.5 PBL を“業務の一部として始めた” にかよる違い

		成果確認に授業内発表会			
		0	1	合計	
業務の一環	0	度数	68 _a	59 _b	127
として		%	53.5%	46.5%	100.0%
	1	度数	10 _a	21 _b	31
		%	32.3%	67.7%	100.0%
合計		度数	78	80	158
		%	49.4%	50.6%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、成果確認に授業内発表会を行っている割合が多いようであった。

		ペーパーテスト		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	100 _a	27 _b	127
	%	78.7%	21.3%	100.0%
1	度数	31 _a	0 _b	31
	%	100.0%	0.0%	100.0%
合計	度数	131	27	158
	%	82.9%	17.1%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものでない方が、ペーパーテストを用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		ポートフォリオ評価		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	119 _a	8 _b	127
	%	93.7%	6.3%	100.0%
1	度数	24 _a	7 _b	31
	%	77.4%	22.6%	100.0%
合計	度数	143	15	158
	%	90.5%	9.5%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、ポートフォリオ評価を用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		学生相互評価		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	108 _a	19 _b	127
	%	85.0%	15.0%	100.0%
1	度数	20 _a	11 _b	31
	%	64.5%	35.5%	100.0%
合計	度数	128	30	158
	%	81.0%	19.0%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、学生相互評価を用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		出席点		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	81 _a	46 _b	127
	%	63.8%	36.2%	100.0%
1	度数	9 _a	22 _b	31
	%	29.0%	71.0%	100.0%
合計	度数	90	68	158
	%	57.0%	43.0%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、出席点を用いて評価を行っている割合が多いようであった。

		ポートフォリオの作成		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	120 _a	7 _b	127
	%	94.5%	5.5%	100.0%
1	度数	26 _a	5 _b	31
	%	83.9%	16.1%	100.0%
合計	度数	146	12	158
	%	92.4%	7.6%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、ポートフォリオの作成を行っている割合が多いようであった。

		関連する文献の紹介		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	87 _a	40 _b	127
	%	68.5%	31.5%	100.0%
1	度数	15 _a	16 _b	31
	%	48.4%	51.6%	100.0%
合計	度数	102	56	158
	%	64.6%	35.4%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、関連する文献の紹介を行っている割合が多いようであった。

		学生による To Do リストの作成		合計
		0	1	
業務の一環 0 として	度数	122 _a	5 _a	127
	%	96.1%	3.9%	100.0%
1	度数	27 _a	4 _a	31
	%	87.1%	12.9%	100.0%
合計	度数	149	9	158
	%	94.3%	5.7%	100.0%

PBL が業務の一部として始めたものである方が、学生による To Do リストの作成を行っている割合が

多いようであった。

		授業に関して他の教員と相談をしよう			
		0	1	合計	
業務の一環として	0	度数	102 _a	25 _b	127
		%	80.3%	19.7%	100.0%
1	度数	16 _a	15 _b	31	
	%	51.6%	48.4%	100.0%	
合計	度数	118	40	158	
	%	74.7%	25.3%	100.0%	

PBL が業務の一部として始めたものである方が、授業に関して他の教員と相談しよう割合が多いようであった。

4. 自由記述分析の集計結果と分析

4.1 Tutor/TA の項目に関する自由記述の集計結果と分析

本項目に回答したのは PBL を実施している教員である。Tutor/TA に関する項目は①役割 ②（授業担当教員との）関わり の計 2 項目であり、それぞれ全回答数は①33 ②27（いずれも Tutor/TA を採用していると回答した 159 名中）であった。全体的に回答数が少ないこと、また回答における記述数が少なく端的に書かれているものが多かったことから、どのような文脈で記述されているのか判読しにくいものも多かった。例えば、「授業進行補助」という記述を見ても、教員の講義の一部を担うようなものであるのか、あるいは授業の一部であるグループ活動中に見回って質問対応を行うといったことなのか等は、にわかには判別しにくい。以下、設問別に述べる。

① 「役割」について

Tutor/TA に課している役割、あるいは役割だと考えられているものは、大きく次の 5 つに分類される。

分類項目	記述例
A) 学習支援 学生の学習活動（課題遂行、実験実習の実施、発表準備等）に対する関与	<ul style="list-style-type: none"> ・ 受講生による課題作成における支援 ・ 受講学生のデザインおよび製作の補助 ・ 受講学生の発表原稿作成補助 ・ 授業案作成にあたっての支援また、現地での学生の授業実施のサポート <p style="text-align: right;">〔回答数 9〕</p>
B) ファシリテーション グループワークや議論の促進を目的としているもの（主に、ファシリテーションという語句使用のもの）	<ul style="list-style-type: none"> ・ グループ学習のファシリテーション ・ グループディスカッションでの議論のファシリテーションなど ・ グループワークの議論の支援 <p style="text-align: right;">〔回答数 6〕</p>
C) 指導・助言 学習支援の中でも特に「指導」「助言」という関係性を明示しているもの	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の指導 ・ 発表の指導 ・ プロジェクト進行のアドバイス ・ プログラミングの技術的アドバイス ・ 調査方法・調査とりまとめ etc の指導・助言 ・ プレゼンテーションのスキル向上の指導・助言 <p style="text-align: right;">〔回答数 15〕</p>
D) 授業補助 直接対学生ではなく、教員の授業実践に関する準備や運営に関するもの	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業進行補助 ・ 教員の補助 ・ 授業準備 ・ 機材管理 ・ 資料整理 <p style="text-align: right;">〔回答数 10〕</p>

E) 学生相談 学習支援や指導・助言場 面に関して、学生からの相 談相手という位置づけを明 確にしているもの	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生の相談 ・ 相談役 ・ 問題解決相談 ・ 技術相談 <div style="text-align: right;">〔回答数 7〕</div>
--	--

A は受講生自身の学習活動を何らかの形で支援することを目的としたものである。

B は集団活動を対象としたスムーズな進行や支援行為に言及しているものと理解できる。この項目は、実際には「学習支援」や「指導・助言」との重複があると思われるが、ここでは用語使用による概念理解が見られるものとして別立てし、ファシリテーションという用語を使用しているものを主に分類した。

C は「A 学習支援」と重複する内容も大いに含まれると考えられるが、主に記述中に「指導」「助言」「アドバイス」等の用語が含まれ、学生との関与関係における関係性を明示しているものを分類している。

D は主に授業外において、授業者である教員の事前準備や事後業務の補助を担うものが該当する。

E は学生からの何らかの相談への対応を指す。相談内容についての Tutor/TA の判断・決定のルート、教員への報告・連絡・相談の有無、授業内外での対応場面等の詳細については様々なものを含む可能性がある。

Tutor/TA の業務対象となる学習活動そのものが授業によって多岐にわたっていると考えられる。そのため、支援や指導、ファシリテーションの実際については、受講学生の主体性をどの程度尊重した関わりであるか、支援の方向性における教員の指示や Tutor/TA の判断等については判別しにくい。具体的な支援内容、関与の度合い、Tutor/TA 自身の主体性や積極的関与の程度については、授業内容とあわせて確認する必要があると思われる。

② 「関わり」について

Tutor/TA と授業担当教員との関わりについては、主に「業務指示」「打ち合わせ」という項目が確認できた。「打ち合わせ」に相当するものの中でも、「情報共有」「情報交換」を特に謳っているものも確認できる。

「打ち合わせ」や「業務支援」と認識している記述においては、Tutor/TA と共同して授業を進める体制であることが窺える。一方、「業務指示」に分類した記述には、TA 作業の指示、業務を指示するともに業務を行う場合も教員の指示に従って準備することが述べられている。中には、「その都度、行うことを指示する。適宜、TA の思うままアドバイスを学生にしてもらい、対応に困った時には教員は TA をサポートする。」のように、業務指示を基本としながら、必要に応じて TA の主体性を尊重した関わりによって業務を遂行する体制もあることを述べているものもある。

設問①と同様、「指示」「打ち合わせ」等、既存の言葉で端的に記述されているため、担当教員自身がその詳細をどのように捉えているのか、実際のサポートの性質や様子が見えない部分が多い。しかしながら、事前準備や片付け等、教員の業務支援だけでなく、授業中の学生の学習活動に関与する場面は少なからず想定されていることはわかるため、学生に、また学習活動・行為に介入・関与することを避けるものではないことが窺える。

Tutor/TA 業務に関する具体的なフィードバックの量・頻度や方法、TA からの「ほうれんそう」に対する指導・助言のあり方については、教員の教育観や学生観、TA 自身のパーソナリティやスキル等に左右されている（委ねられている）可能性も高いと推察される。「研究者の卵」として Tutor/TA に経験させておくべきと考えていることと、「教育者の卵」として Tutor/TA に自ら考え行動してほしいことや伝えたいこと、必要だと考える経験が、業務の内実や体制に影響を及ぼしていると考えられる。また、Tutor/TA に求める役割は、専門分野の専門性や教員自身の被教育経験とも関係している可能性があるのではないかという点も今後考察が必要であろう。それにより、Tutor/TA に対する教育・研修内容や機会の再検討が求められるとともに、Tutor/TA を採用する担当教員を含めた連携・協同体制や指導形態の見直しも有効だと考えられる。Tutor/TA 自身にとっても、PBL 教育を核としたフューチャーファカルティプログラム (FFP) の導入やティーチング・ポートフォリオ等を用いた自己省察機会を設ける等、教育力、研究力ともに育成・研修できる場の構築を目指すことが必要だと考える。

分類項目	記述例
業務指示	<ul style="list-style-type: none"> ・ TA 作業の指示 ・ 業務を指示する
打ち合わせ	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事前・事後での打ち合わせ ・ 事前に授業進行について打ち合わせを行い、役割や支援の内容の指示を行っている。 ・ TA に教科書を渡し、学習範囲と対応方法を事前に説明し、学生からの質問を聞く。
情報共有・情報交換	<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業案作成にあたって、密に連絡を取っている。 ・ 毎回の講義後にカジュアルな意見交換を行っている ・ 授業開始前にどのように進めていくかを連絡している。また、授業案作成状況について情報共有をしている。

4.2 PBL の詳細 (ICT, ワークシート, 専用教材, 成果物) の自由記述の集計と分析結果

ICT の利用状況について見ると、PBL を行っているとした 159 の授業のうち約 1/3 にあたる 54 授業で moodle を使用していることが分かった。その他にも動画サーバやプログラム開発支援ツールの活用など、授業の特徴に応じた ICT 活用事例も見られた。ただし、moodle と e-portfolio 以外の ICT を活用しているとした回答数は 6 件と少なかった。これは文部科学省が大型スクリーンへの資料提示なども ICT 活用に含むとしていることを鑑みれば、159 件中 6 件という回答数は少なすぎると考えられ、ICT 活用とは何かという定義が共有されていない課題があるのかもしれない。また、2018 年度入学生より全学的にノートパソコンの必携化制度が導入されたことにより、ネットワーク環境もさらに充実し今後より多くの授業で ICT が活用されると想定されると考えられ、ICT 利用に関する動向は大きく変化する可能性もあり授業での活用を扱う研修などの支援も必要であろう。

一方、ワークシートの利用については、「知識習得用」「課題用」「グループ活動用」「振り返り用」など目的別にワークシートが活用されていたほか、その形態も印刷物以外に web を活用した事例もあった。

また、独自作成した教科書や事例シナリオの活用のほか、映像資料やプログラミング環境を使用した事例も見られた。

最後に、学生の授業での成果物の作成状況については、成果発表資料の作成を挙げる回答が多数を占めた（具体的記述のあった 29 件中 15 件）。成果物として学習指導案や企画書、提言書、プログラム、ロボット製作など授業の内容に応じた成果物が挙げられていた。

4.3 授業内外での教員の関わりの自由記述の集計と分析結果

4.3.1 はじめに

アクティブラーニングはボンウェルとアイソンが先駆的に示した著書 *Active Learning Creating Excitement in the Classroom* で整理されて示されたとされており、教員は情報の伝達よりも学生のスキルの育成に重きを置き、学生自身が授業を聞く姿勢のみならず、読む、議論する、書くという学習活動に関与しながら高次の思考である分析、統合、評価に関わる機会を設けることが示されている。その結果、学生が自身の価値観や求められる活動のなかでの自身の態度を探究するようになることが期待されている。反転授業やピアインストラクションと並び、PBL (Problem based Learning, Project Based Learning) は、こうした期待される成果の達成を求めて実施される、知識の内化と外化を融合させる教育手段の一つである。しかしながら、現実には学生の学びの格差は否めず、グループワークにコミットできないフリーライダーと呼ばれる学生の存在、グループワークが活性化できない状況、思考上の論理と現実がかみ合わない思考と活動の乖離が存在する（松下他, 2015）。そこで、PBL においてはグループワークに導くための準備、グループワークの支援、そしてその成果を発表して仲間と共有したり、結果を公表することで現実とのすり合わせをしたりする過程がたどられ、そのなかで教員による多様な関わりが不可欠である。しかし PBL が多様な問題を扱うことも含めて、有益な対応は常に試行錯誤した状況を脱していない。

本調査における「授業内および授業外での教員の関わり」は、現在、PBL を実践している教員らが創意工夫しながら行っている対応方法の実態を集約し、共有すべき点、または強化すべき課題の抽出を目的とした分析である。

4.3.2 分析方法

2017 年 12 月～2018 年 1 月に実施した三重大学における PBL 実態調査のデータを用いて以下の手順で分析した。

- 1) 質問項目「授業内での関わり」「授業外での関わり」に記載または入力された回答を一覧表にした。
- 2) 全ての記述を読み、1 文につき 1 文意となるよう文章を区切り整理した。
- 3) 記述の意味する内容を慎重に解釈しながらコード化した。コード化にあたっては、表現は異なるが同意であると解釈されるものをコード表にとりまとめ、それをもとにコード化した。
- 4) 授業内の関わりについて、関わりの時期を文脈から解釈し、「ワーク」「発表準備」「発表」「発表後」としてコードを時系列で示し解釈した。
- 5) 授業外の関わりについては、どのようなことを目的とした関わりであるかという観点で解釈し、分類した。
- 6) 分析 4) 5) に該当する関わりをしている教員数を算出し、PBL を実施している教員の、学生支援の傾向を解析した。

4.3.3 結果

PBLを実施していると回答した159人のうち、授業内での関わりについて回答した人は117人(73.6%)であった。42人は無回答または該当しない記述とみなし、分析から除外した。117人の記述から、176文章を抽出し分析した。授業外での関わりに関する回答は81人(50.9%)であり、87文章を分析の対象とした。

1) 授業内外での関わりの概要

授業内での関わりに関して21のコードを抽出した(表1)。次に授業外での関わりに関して11のコードを抽出した(表2)。

表1 授業内での関わりのコート表

コード番号	コード	含まれる用語				
1	TAのサポート					
2	アドバイス	情報提供	実験補助	助言	指導	ヒント
3	意見の統括	発表内容の活用				
4	解説	質問への返答				
5	課題提示	宿題提示	小テストを課す			
6	活動の羅針盤					
7	講義					
8	個別支援					
9	コメント	フィードバック				
10	コメントの統括を指示					
11	思考の連携補佐	つなぎ	机間指導			
12	状況の可視化					
13	進捗把握	聞く				
14	相談に乗る					
15	討論促進	ディスカッション				
16	共に考える	巻き込まれる				
17	発言促進	発表会での司会	発表会での質問	グループワークの歩調取り		
18	評価					
19	ファシリテート	チューター				
20	プレゼン指導					
21	見守り	フランクに接する				

表2 授業外での関わりのコート表

コード番号	コード	包含される用語				
1	学習環境調整のための交渉・準備	現地とのアポイント	制作場所の提供	装置の貸し出し	スケジュールの調整	
2	学生の動機づけのための関わり	気軽に質問を受けられるようにする				
3	次回の授業案の構想準備	指導案指導				
4	質問相談対応	レスポンスシートへの対応	moodleにより質問を受け付けている	部屋にい質問を受け付ける体制をとっている	メールでの質問を受け付ける	メールで予約を受け付け面接で指導
5	授業内で授業外活動の方向性を指示					
6	授業方法の研究					
7	成果達成状況の確認	テストの採点				
8	成果達成のための指導	課題や参考文献の提示	プログラム作成への助言	指導案作成の指導	まとめ方、レポート作成の助言	グループ指導
9	提出物への評価コメント	レポートの評価	moodle、課題へのコメント	レポートの添削		
10	見守り					
11	レポートチェックと提出催促					

2) 授業内での関わりの対象と時期

授業内での教員の関わり（表3）は、グループワーク（以下、ワーク）に至るまでに講義や課題を提示してワークのための伏線的知識の準備を整えていた。続いてワークに入ると、個々のグループで主体的に議論を進めることができるよう全体に活動の目標や方向性を示し（活動の羅針盤）、学生の主体的なワークの運営を見守りながら、適宜討論の様子を感知し、必要に応じて出された意見に注目してメンバーの発言を求めたり、提出された情報を可視化するサポートをしたりしていた。可視化に際しては意見を図示することで、学生が口述で提示する内容を図示しながら、概要を捉えることを支援する介入であった。

授業外では、学生からの質問に個別に回答したり助言したりすることで学習を促していた。その他、学生からの成果物であるレポートなどにコメントを付記し、次回の学習への動機づけを促進するものがあった。その他、学生とのつながりばかりでなく、学生が自主的な活動を円滑に進めることができるように実験や演習等の環境を調整したり、授業研究に時間を割きよりよい学習環境を整備したりすることで、間接的に学生への対応をしているものもあった。学生の主体的な学習を促進するもう一つの手段として、授業内で自己学習の方向性を明確に示し、その後は見守る体制をとっている教員もいた。

表3 PBLにおける授業内での教員の関わり

		PBL学習の行程----->						
		ワーク外	ワーク	発表準備(資料作成)	発表準備(発表練習)	発表	振り返り	科目終了後
関 わ り の 対 象	全体	課題提示 講義	活動の羅針盤 状況の可視化 討論促進 見守り			発言促進	コメント コメントの 統括を指示 意見の統括	
	学生 (個別)		思考の連携補佐	アドバイス 解説 個別支援 相談に乗る	プレゼン指導			評価
	グループ		共に考える ファシリテート					
	TA		TAサポート					
	プログラ ム		進捗把握					

表4 PBLにおける授業外での教員の関わり

関わる対象	対応コード		
学生への対応	学生の動機づけのための関わり	質問相談対応	成果達成のための指導
学生の成果物への対応	成果達成状況の確認	提出物への評価コメント	レポートチェックと提出催促
環境調整	学習環境調整のための交渉・準備		
授業構想, 授業準備	次回の授業案の構想準備	授業方法の研究	
特別な介入なし	授業内で授業外活動の方向性を指示	見守り	

3) 各対応技法の活用割合

授業内外での対応において、抽出された対応技法を実践している教員の割合を表5(授業内)、表6(授業外)に示した。授業内で最も多い関わり技法はアドバイスであり約3分の1の教員が実践していた。続いて、講義、コメント、課題提示、発言促進を実践している教員が約1割見られた。学生への個別対応をしている比重が多くみられた(表5)。

授業外での対応は約半数の教員が学生からの質問や相談に対応していた。続いて、成果達成のための指導(22.2%)、提出物への評価コメント(11.1%)であり、学生とのつながりのある技法を用いている傾向があった。学生の自主学習を促進する環境調整や授業方法の研究に時間を費やす教員も少数ではあるが(各6.2%、1.2%)みられた(表6)。

表5 PBLにおける授業内での教員の関わり
(n=117)

コード	回答者数	%
アドバイス	41	35.0
講義	14	12.0
コメント	14	12.0
課題提示	13	11.1
発言促進	13	11.1
解説	10	8.5
ファシリテート	10	8.5
見守り	7	6.0
活動の羅針盤	5	4.3
思考の連携補佐	5	4.3
進捗把握	5	4.3
討論促進	5	4.3
プレゼン指導	5	4.3
意見の統括	4	3.4
共に考える	4	3.4
TAのサポート	2	1.7
個別支援	2	1.7
状況の可視化	2	1.7
評価	2	1.7
コメントの統括を指示	1	0.9
相談に乗る	1	0.9

註) 各対応方法の回答者数は同一対象者による回答を除去した数
パーセンタイルは母数117に対する割合

教員が対応する対象	回答者数
全体への対応	38
学生への個別対応	79
小グループへの対応	14
TAへの対応	2
プログラムへの対応 (再検討など)	5

表6 PBLにおける授業外での教員の関わり

(n=81)

対応方法	回答者数	%
質問相談対応	45	55.6
成果達成のための指導	18	22.2
提出物への評価コメント	9	11.1
学習環境調整のための交渉・準備	5	6.2
学生の動機づけのための関わり	2	2.5
授業内で授業外活動の方向性を指示	2	2.5
見守り	2	2.5
次回の授業案の構想準備	1	1.2
授業方法の研究	1	1.2
成果達成状況の確認	1	1.2
レポートチェックと提出催促	1	1.2

註) 各対応方法の回答者数は同一対象者による回答を除去した数
パーセンタイルは母数81に対する割合

関わる対象	回答者数
学生への対応	65
学生の成果物への対応	11
環境調整	5
授業構想、授業準備	2
特別な介入なし	4

4.3.4 考察

分析結果をもとに、三重大学でPBLを実施している教員の授業内外での対応の実情の傾向について解釈するとともに、抽出された対応方法から、PBLを体験しながら学んでいる学生の特徴を読み取ることとする。そして、PBLが抱える学生への影響の課題点（フリーライダー、不活性なグループワーク、思考と理論の乖離）への対策として、どのような対応が有益であるかを考察し、共有すべき点、強化すべき点について言及する。

1) 現状の授業内外の対応の傾向とPBLを体験している学生の学びの段階への示唆

結果から浮かび上がった、PBLを支えている教員の対応は、主に3つの傾向に分類されると考えられる。ひとつは、グループでの討論に教員がメンバーの一員としてフランクな姿勢で交わりながら、共に考えたり時には話し合いの方向性を示すような問いを投げかけたりして、テーマとなっている分野の先駆的立場の者として、学生に思考の模倣を促したり探究する姿勢のモデル像を示したりするものであった。グループの学生の興味関心を身近な距離で鼓舞する特徴を捉えると、まねて学ぶことの醍醐味を刺激する対応といえる。2つ目は、グループワーク内でも個々の学生からの質問や相談に対応し、既習の学習と現在進めているワークの接点を説明し、個々の学生に学びの記憶を強化することを支援しているものであった。これは学生個人の力に見合った記憶強化支援の対応といえる。そして3つ目は、グループワークに向けて事前の授業で課題を提示したり必要な知識を教授する準備をし、グループワークでは、学生が提示した意見や情報を適宜、全体にも還元（状況の可視化）したり、討論を促進するための鼓舞を全体に投げかけたりしていた。クラス全体のグループにワークの流れを提示し、以後は自主的に進めてもらいながら、提示された意見を適宜、集約し、共有するようにコーディネートしていた。これは、学生が自他の比較をして、知見を深める機会に発展することを目指した方法と解釈でき、思考の深化拡大のためのグループダイナミックスのコーディネーター的な対応といえる。

こうした解釈に立つと、今回の結果に示された、授業内の「学生へのアドバイスやコメントを個別に対応しているケースが多い」ことや、授業外において「学生からの質疑応答に個別に対応しているケースが多い」傾向から、学生の学びの段階は、まねて学ぶことの醍醐味を感じ、現行の学び既習の学びの整理への支援が必要な段階であると解釈することもできる。

2) 対応策への言及

PBLを、教授する手段のみならず学生が学ぶ手段でもあることを改めて認識すると、PBLは学生の学びの主体性を育み、思考を深める成果を目指せる手段であるが、最初からそれらを達成できるものではない。この視点に立つと、PBLによる学びには学びたいという意欲が刺激され、現在の思考が既習の学びとどのように結びつき、今度新たに何を学ぶべきかという展望をもち、やがて、自らの思考と他者の思考を比較検討しながら知見を拡げ、再び、それが学ぶ意欲の刺激になる、という循環系をもった構造をなしているのではないかと考えられる。この場合、教員の対応は、学生がどの段階にあるかに応じて多様に変化させる柔軟性が求められるといえる。仲間と共に話しあい、そこに関わった教員が魅力的な思考力や発想を提示することに学びの醍醐味を得ることができれば、主体的に学ぶ基盤が整うであろう。随時、蓄積していく知識や思考内容に圧倒されそうな時に、既習の知識や思考と結びつける助けを個人対応で得ることができれば、学びの内容を整理することができ、学びの量や拡がりや自己コントロール可能なものとして捉えるゆとりにつながるであろう。自らが導き出した思考や整理した知識と他者の思考や知識を、集

合させるだけでなく教員の介入で整理されれば、理解や興味の方向性が明確になり、新たな興味関心をもたらすだろう。

本分析では各対応を実施している教員が、PBL で何を目指しているかについての解析には至っていないが、一般的に、PBL において目指す目的に応じて多様な対応が期待されていることを鑑みると、現状の三重大学における PBL 授業のなかに対応の多様性が存在するといえる。今回3つのタイプを活用の背景に、どのような目的が存在するかについては分析に至っていないが、今後、対応の多様性とその成果を分析する調査へと発展させることができれば、PBL の過程のなかで学生の学びの段階とそれに適用できる有益な対応方法を融合した教育メソッドにつなげる可能性があると考えられる。

参考資料

松下佳代 (2015), 大学授業を深化させるために ディープ・アクティブラーニング, 勁草書房.
佐伯胖 (2005), 授業改革の原点「学び」を問いつづけて, 小学館

4.4 PBL の成果の自由記述の集計と分析結果

PBL を実施している教員に対し、「PBL を導入して良かったことはどのようなことですか。また、PBL だからこそ得られた成果として挙げられるものはありますか。下記にお書きください。」についてたずねたところ、159 人中、本質問項目へは 78 件の自由記述を得た。回答の内容の詳細は、以下の通りである。

1) 学生に関する内容

学生について言及した内容は、「学習に関する内容」、「意識、姿勢・態度に関する内容」、「資質・能力の向上に関する内容」に大別された。「学習に関する内容」が最も多く、次に、「意識、姿勢・態度に関する内容」、そして「資質・能力の向上に関する内容」と続いた。

「学習に関する内容」については、PBL を通して、主体的に取り組んだり、他者と協同したり、プレゼンを準備したりするなど、様々な学習機会や経験が提供できたことを言及した内容が多く見られた。また、テーマについて深く探究したり、より専門的な文献を読むなど、学生の深い理解や深い学びに繋がったという指摘や、グループなどを活用した他者との活動を通じた学びの促進を評価する内容、学修した内容を他の授業の履修や自己学習の場面などの様々な学習機会に応用することに言及した内容、そして、授業における取り組みの内容そのものや、取り組みを通して得られた成果について評価に関する内容があった。

「意識、姿勢・態度に関する内容」については、学生の主体的な学びや能動的学習が促進されたという指摘が最も多く、学生について言及したコメントの中で最も多い 27.4%を占めた。学生が積極的に取り組み、主体的に学ぶ姿勢を身につけたり、自発的な学習態度で課題を探究したり、授業外の学習時間が増加したことが指摘された。この他、学問への興味関心や意欲、意識の向上について言及した内容も見られた。

そして、「資質・能力の向上に関する内容」については、考える力や問題解決力などの他、情報収集やプレゼンテーションのために必要とされる学習スキルや、他者に説明をしたり、他者と議論をする際のコミュニケーションスキルなどの社会的スキルの向上などが指摘された。

2) 教員自身に関する内容

本調査からは、PBL の実践を通して、学生の学びだけではなく、教員自身についても「良かった」「成果がある」と考えているという実態が明らかになった。

教員自身に関する内容において最も多かったのは、学生が受け身になるのではなく、自ら考える授業ができるようになったという授業における変化や実践を通じた授業における課題の発見や授業改善に繋がったなど、授業における変化や工夫に関する指摘であった。また、学生とじっくりと向き合い、意見交換の機会が増えたことなど、コミュニケーションの機会が増加したこと、そして、そのような学生との相互作用や成果発表から新たな気づきを得られたり、学生スキルの上達を実感するなど、学生の成長を実感した点についても指摘された。

以上のように、PBL の実践を通して「良かった」「成果があった」と感じる内容は、学生が主体的に学び、大学での学びにおいて必要とされる資質・能力を身につけながら、自ら探究を進めて行く姿勢や態度が形成されている姿が明らかになった。また、教員自身の視点からも、授業における工夫を促し、学生と共に取り組みながら進めることにより、学生自身の成長を実感する機会にもなっていることが明らかになった。

4.5 PBL の課題の集計と分析結果

質問文【PBL で「こういうところが上手くいけばより成果が上がる」と考えられるような課題点がありますか。下にお書きください。】について、PBL を実施している教員 159 人中本項目へ 58 件の自由記述を得た。回答内容は、4つの大カテゴリ（PBL 実施前の課題、PBL 実施中の課題、PBL 実施後の課題、PBL についての感想・そのほか）に分類された。

「PBL 実施前の課題」が最も多く（44.1%）、次いで「PBL 実施中の課題」（40.6%）、「PBL 実施後の課題」（10.1%）、「PBL についての感想、そのほか」（5.1%）と続いた。*表：（8）課題点（自由記述）の集計結果と分析参照

カテゴリごとの詳細は以下の通りである。

1) カテゴリ：「PBL 実施前の課題」

適切な難易度の課題設定、人数設定などの「PBL による主体的な学びを引き出す授業計画」の重要性が指摘された。「PBL による主体的な学びを引き出す授業計画」は、「ファカルティ・ディベロップメント」によって解決できるかも知れない。

「PBL を実践しやすいカリキュラム」、「PBL に適した教員数・設備（ラーニングコモンズ、インターネット環境、プロジェクター、教室など）」により、カリキュラムや教員数・設備・教育資源が、PBL による主体的な学びを引き出すために重要であると指摘された。

また、PBL への参加にあたり、あらかじめ学習者自身の基礎学力を高めておくことの重要さも指摘された。

本カテゴリの課題解決には、教員単体での努力に加え、学部や大学全体による PBL による主体的な

学びの促進に必要かつ適切な物的・人的資源の配分・カリキュラムの設定が必要と思われた。

2) カテゴリ：「PBL 実施中の課題」

学習者の「主体性を高める授業運営」を通じ、課題解決の実践における失敗や試行からの学びを引き出すことの重要性が指摘された。

また、「学生・教員間のコミュニケーション」による学びの促進の重要性も指摘された。

本カテゴリの課題解決には、「学生の主体性向上」も含めて、PBL に適した授業運営方法などを学ぶファカルティ・ディベロップメントが役立つと思われた。

3) カテゴリ：「PBL 実施後の課題」

授業の質向上を目的として、「教員へのフィードバック・振り返り」、「学生の学びの集積・利用」が指摘された。

加えて、PBL の特徴である「授業後の実世界へつながる学生の学び」を意識した授業後のフィードバックの重要性が指摘された。

本カテゴリの課題解決には、PBL 実施教員へのフィードバック機会提供の拡充や、学生の成果物の集積システムの構築が役立つかもしれない。

4) カテゴリ：「PBL についての感想・そのほか」

「PBL への感想や本アンケートへの感想」が記載されていた。

本項目の分析から、PBL に向けたカリキュラムの整備や、資源（教員数・教室・IT 環境・IT 機器・ラーニングコモンズなど）の整備を PBL 実施教員が学科・学部へ求めていると思われた。加えて、ファカルティ・ディベロップメントや教員間でのフィードバックや学習者の学びの共有により、授業の質向上を目指し前向きな視点を PBL 実施教員が持つことが明らかとなった。

補足)

なお、全教員向けアンケートでも、PBL 実施していると選択した教員を対象に、PBL の成果向上の為の課題について自由記載を求め、23 回答を得ている。

内訳は、「PBL 実施前の課題」15 件、「PBL 実施中の課題」6 件、「PBL 実施後の課題」0 件、「PBL についての感想・そのほか」2 件であった。実施前の課題については、適切な授業計画についての記載が多く、実施中の課題については、主体性を高める授業運営の記載が多かった。いずれも内容は、上記記述とほぼ同様であった。

表：（８）課題点（自由記述）の集計結果と分析

理由	回答数(全 59 回答)	割合 (%)
【PBL 実施前の課題】	26	44.1
PBL を実践しやすいカリキュラム(4)		
PBL に適した教員数・設備（ラーニングコモンズ，インターネット環境，プロジェクター，教室など）(9)		
PBL で応用できる基礎学力の事前確保(2)		
PBL による主体的な学びを引き出す授業計画(9)		
ファカルティ・ディベロップメント(2)		
【PBL 実施中の課題】	24	40.6
主体性を高める授業運営(13)		
学生・教員間のコミュニケーション(3)		
学生の主体性そのもの(4)		
PBL に適した大学の規定（学外活動の制限）(1)		
学生の学習時間の確保(3)		
【PBL 実施後の課題】	6	10.1
教員へのフィードバック・振り返り(2)		
授業後の実世界へつながる学生の学び(2)		
学生の学びの集積・利用(2)		
【PBL についての感想・そのほか】	3	5.1
PBL への感想や本アンケートへの感想(3)		

4.6 現在 PBL を行っていない理由（自由記述）の集計結果と分析

本項目に回答したのは PBL を実施していない教員であり、回答数は 91 だった。その全体の傾向は、表の通りである。理由として、最も多いのが「科目の性質上 PBL が適していない」（38%）であり、次いで「授業形態上困難」（13%）と「PBL に意義や必要性を感じない」（12%）が挙げられていた。

これらの理由を分析すると、PBL 教育を導入するか否かに対して明確に判断して実施していない場合と、やむを得ず実施していない場合とがあることがわかる。

（1）PBL 教育に対して明確な判断の下に実施していない場合では、主に 2 つの立場が見られる。一つ目は、「PBL に意義や必要性を感じない」という PBL に対する消極的あるいは否定的評価による。PBL を積極的に評価できない理由としては、表に示したように一つではなく複数挙げられている。基礎知識の習得、学生の自主性、グループ活動などに対して積極的な意味が見いだせないことが指摘されている。二つ目は、回答数が最も多かった「科目の性質上 PBL が適していない」という判断である。その主な理由は、基礎的な知識や技能から専門教育も含めて、知識・技能の習得を目的とする科目においては PBL 教育は適していないということである。

前者では PBL という教育法全般への否定的認識が示されている。しかし後者は PBL は知識・技能の習得という面では適していないという PBL 教育の一面に対する批判が示されている。しかし PBL 教育に対する基本的理解や知識や技能の習得に関する PBL の効果については、両者と反する考え方も提示されている。今後そのような相反する議論も率直に交流されるなど、さらに PBL 教育の理論と実践の検討が進む中で検証されていく必要があるだろう。

（2）PBL 教育をやむを得ず実施していない場合も、いくつかの理由に分けることができる。一つは、制度上の困難である。すなわち「授業形態上の困難」あるいは「カリキュラム上の困難」とまとめられる理由である。「授業形態上の困難」では、共同開講形式の授業科目のため、担当時間数が少なくかつ授業方法を個人だけの判断では決めることが困難なことが指摘され、あるいは受講者数が多いことも理由として挙げられている。「カリキュラム上の困難」では、全体のカリキュラムが決まっているために PBL を用いる科目を新設できない、あるいは CAP 制などが不十分なため事前・事後の学習に時間を要する PBL 科目を実施できないという指摘がされている。

このような制度上の困難については、各授業科目の性格やカリキュラム構成に関する各部局さらには学科等の教育組織における PBL 教育に対する制度的な検討と判断に委ねられる。

二つめの理由は、教員個人の業務条件上の困難さである。つまり時間上の余裕がないために、PBL を導入するように授業方法を変更したり、あるいは PBL を用いた新しい授業科目を新設することができないという理由が挙げられている。これらの理由も、たんに教員個人の努力の問題に帰されるべきものではなく、上記のようなカリキュラム構成の中で検討されていくべき問題である。

またそれだけでなくオンライン教育システムを充実させることによって、少しでも PBL の導入を容易にする工夫も必要だろう。たとえば、PBL を実施するのに役立つリソースや、PBL 教育の成果をまとめた諸論文、報告、記事を Moodle 上にアップして誰にでも活用できるようにするなどが考えられる。

三つめの理由は、PBL 教育について十分に周知されていないことである。すなわち「PBL とは何かかわからない」「PBL の方法や組み込み方がわからない」など PBL の実施方法や授業への導入方法がわからないという指摘がされている。実施していない理由として「赴任して間もないため」という記述が複数挙がっていた。そのように三重大学には毎年多くの新任教員があり、そうした教員に PBL 教育の目的・

内容・方法と三重大での経過を伝え、理解を広めていくことが必要とされる。

その他、記述の中には、現在は実施していないが、準備中や検討中であつたり、実施可能と記している回答が複数あつた。

理 由	回答数	割合(%)
<科目の性質上 PBL が適していない>	35	38
<ul style="list-style-type: none"> ・基礎知識の習得やスキルの獲得と目的にしているため ・学習すべきに内容が多く、難しい内容もあるため ・学問の性格上なじまない。専門教育のため。 		
<授業形態上困難>	12	13
<ul style="list-style-type: none"> ・オムニバス形式のため ・授業回数に限られているため ・受講生数が多いため 		
<PBL に意義や必要性を感じない>	11	12
<ul style="list-style-type: none"> ・基礎知識の習得がおろそかになる ・グループ活動に意義は感じない ・学生の自主性に任せると成果が上がらない ・個人間の格差が広がる 		
<カリキュラム上困難>	6	7
<ul style="list-style-type: none"> ・すでにカリキュラムが決まっていて新たな授業科目の設置が困難 ・CAP 制など授業履修制度が不十分 		
<PBL を実施する余裕がない>	7	8
<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの授業方法を作りかえる必要があるが、それを行う余裕がない ・新たな授業を行ったり、準備をする時間がない 		
<PBL の導入・実施方法がわからない>	5	5
<ul style="list-style-type: none"> ・PBL の方法や組み込み方がわからない ・PBL とは何かかわからない 		
<その他>	15	16
<ul style="list-style-type: none"> ・他の方法を導入している (2) ・義務でない、担当ではない (3) ・準備・検討中。実施可能 (4) ・特に理由なし (4) ・赴任して間もないため (2) 		
計	91	

5. おわりに

三重大学では平成 18 (2006) 年に PBL 教育を開始してから 13 年になる。この間 PBL 教育に関する施策を様々に進めてきたが、全学的な実態調査は今回が初めてである。この調査に対して、有効回答数が「(全教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査」が 194 回答、「(授業実施教員対象) 大学での PBL 授業に関する調査」が 159 回答だった。前者については両者に回答した教員がいることが予想され、後者には PBL 科目を複数開講している場合に複数の回答をした教員がいることが予想されるため、正確な回答教員数および回答率を示すことは困難である。しかし全体として本学で授業を担当している過半数の教員から回答いただいたと想定される。このような多数の教員に回答いただき、またそうしたアンケートの配布と回収などに多くの職員にご協力をいただいたことに、まずお礼を申し上げたい。

お陰様で、回収されたアンケートは、回答者の分布については、構成人数を考慮すれば所属もほぼ均等であり、幅広い経験年数の回答が得られたと考えられ、全学的にバランスが取れた、信頼性のあるデータを得ることができた。

本報告書で詳述されているが、このアンケートによって本学の PBL 教育の実態、成果、課題、そして教員の意見など、新たに明らかになったことは大変多く、実態調査として大きな成果があったと言える。たとえば、(全教員対象) 調査では、PBL を現在授業に取り入れている教員(実施グループ)は回答者のほぼ半数であり、他方で未実施の教員の内約 8 割が「PBL に関心があり」、半数近くが「やってみたい」と回答しているように、予想以上に PBL 教育への関心が高いことがわかった。また教員経験年数 15~25 年の階層で実施率が高いことがわかった。さらに着任 5 年以下の階層で未実施が多いことがわかり、その 6 割以上が「やってみたい」と回答するなど、近年着任してきた教員に対するサポートにおいて大きな課題があることが明らかになった。

(授業実施教員対象) 調査では、本学の PBL 教育の全体的な実施状況が明らかになった。PBL の実施科目の中で、必修科目 6 割以上、基礎科目 4 割、応用/発展科目約 5 割の構成で、実施形態は 1 授業科目当たりほとんどが複数回実施、4 割が全回実施であり、問題提示型 PBL が約 7 割を占める、という状況である。評価方法は、レポート等の提出が最も多く、続いて、出席点、パフォーマンス評価、観察評価が多く、さらにリフレクションシート活用、関連文献の紹介、日常的な情報の紹介、相談のための時間の設定、協同学習の技法の活用、PBL 成果の研究発表、他の教員と相談するといった様々な工夫が重ねられているということも明らかになった。また PBL を始めたきっかけについて、約半数の教員が自らの意思で開始したと回答し、きっかけは業務など外的な要請もあるが、学内外の FD 研修会や学生の成果発表、文献を見たことなどが多いという結果にも留意する必要がある。

さらに(全教員対象)と(授業実施教員対象)の両者に共通した回答結果が見られたことも注目される。それは授業実施に当たっての物的・人的条件やサポートである。すなわち、PBL を開始するための要件としても、そして PBL を充実させるのに求められるサポートとしても、「授業事例集」と「人的・経済的支援」の要求がともに高く、その他には「教室環境の整備」と「位置づけの明確化」が望まれていた。つまり授業内容について参考になる「授業事例集」、少人数グループ学習形態やパソコンなどの機器の使用を可能にする「教室環境の整備」や「人的・経済的支援」が求められている。「位置づけの明確化」とは、PBL の目的や内容と同時に、カリキュラム上の位置づけがさらに明確に示されることが必要とされているのである。

これら全体の集計の結果は、各項目の自由記述にも詳細に示されており、参照していただきたい。

今後、本調査結果をふまえて、PBL 教育の周知、様々な支援策の実施、カリキュラム面の検討などの PBL 教育体制の改善が図られる必要がある。それと同時に「現在 PBL を行っていない理由」の回答結果に示されているように、PBL 教育に否定的あるいは消極的な意見があることも確かである。それは、学問の性格、教育観、あるいは業務の多忙さなどを背景にしている。こうした考え方の違いを尊重し合いながら、三重大大学の学生教育の改善、とりわけアクティブラーニングの推進という方向で、議論と実践を重ねながら、相互に意見交換し練り合いながら取り組んでいく必要がある。

大学での授業実践に関する調査（全教員対象）

この調査は、大学での授業実践について尋ねるために行うものです。

授業の実態を捉えるための調査であり、「PBLに関する認識や理解」を確認するものではありません。思った通りにお答えください。

回答された調査用紙は記号化され、コンピュータにより統計的に分析されます。そのため、本調査への回答の有無や回答の内容によって、ご協力いただいた方にご迷惑をおかけすることは決してありません。

この調査は、コンピュータにデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護をいたします。

※なお、既に「三重大学 PBL 推進プロジェクト」から直接学内便でアンケートを受け取っている方は、このアンケート（「大学での授業実践に関する調査(全教員対象)」）への回答は不要です。学内便で届けられた方のアンケート（「大学での PBL 授業に関する調査(授業実施教員対象)」）にご回答ください。

まずは下記の項目、および、続く質問項目にお答えください（任意ではありますが、できる限りお答えください）。

所属学部・部局：_____

教員経験年数：約 _____ 年（高等教育機関におけるもの・非常勤も含む）

着任年数：約 _____ 年

年間授業担当コマ数：_____ コマ

氏名：_____

[氏名を書いていた場合、インタビュー等の追加のお願いなどをさせていただく場合があります]

moodle での回答も

可能です。



<https://portal.mie-u.ac.jp/moodle2/course/view.php?id=3432>

三重大学地域人材教育開発機構 PBL 教育推進プロジェクト
お問い合わせ先：chiikijinzai@ab.mie-u.ac.jp（金野/小竹）

(1) あなたが現在担当している授業についてお答えください。
あなたの授業において採用されているものとして該当するもの
全てにチェックをしてください。

- 具体的・現実的問題から出発
- 問題解決を指向
- 学習課題を学生自身が設定
- 学習の進行を学生が主導
- グループ学習の活用
- 教員はファシリテーター（学習支援者）として関与
- 学習に必要な資源の確保
- 授業外の学習時間と場所の確保
- 学生による自己の省察
- 学習のプロセスの評価を重視

(2) 三重大学では、現在、下記のような概要全てに該当する
授業形態を「PBL」と捉えています。

- ・問題解決もしくはプロジェクト達成との関わりの中で学習が進む
- ・教員主導ではなく学生の主体的な活動によって学習が進む
- ・協同の活動を通して学習が進む

このような概要を満たす PBL を現在授業に取り入れていますか？

はい ・ いいえ

「いいえ」と答えた方は・・・本ページの（3）に進んでください

「はい」と答えた方は・・・3 ページ目の（5）に進んでください

（2）で「いいえ」とお答えの方は以下の（3）からの問いにお答えください。

（3）現在、PBL を行っていない理由をお書きください。
また、このようなサポートがあれば PBL を始めてみたいという要件は
ありますか？

理由

要件 該当するものに○を付けてください。

- () PBL 授業の立ち上げに当たって相談や助言、資源の提供が受けられる
[具体的には：]
- () 学科の中に PBL について相談し合える教員グループがある
() 学部の中に PBL について相談し合える教員グループがある
() 全学に PBL について相談し合える教員グループがある
() 学部や研究科で、PBL を推進する委員会等がある
() 参考になる PBL の授業事例集がある
() TA などの人的な授業支援がある
() 授業経費などの経済的な授業支援がある
() その他 ()

(4) PBL に関する興味や関心をお持ちですか？以下の選択肢から1つをお選びください。

- () 興味・関心があり、やってみたい
() 興味・関心があるが、やってみたいとは思わない
() 興味・関心がない
() その他

※続いて、次ページ(6)をお答えください

(2) で「はい」とお答えの方は以下の(5)からの問いにお答えください。

(5) PBL の展開に関わって、意見をお聞かせください。

PBL をさらに充実・展開していくためにどのようなサポートが必要だと思いますか。

該当するもの全てに○をつけてください(複数回答可)

- () PBL 授業の実践に当たって相談や助言、資源の提供が受けられる
[具体的には：]
- () 学科の中に PBL について相談し合える教員グループがある
() 学部の中に PBL について相談し合える教員グループがある
() 全学に PBL について相談し合える教員グループがある
() 学部や研究科で、PBL を推進する委員会等がある
() 参考になる PBL の授業事例集がある
() TA などの人的な授業支援がある
() 授業経費などの経済的な授業支援がある
- () 効果的な事例問題の開発
() 効果的なプロジェクト課題の設定
() PBL を取り入れた一授業科目の授業の計画の仕方の助言
() 効果的な PBL を取り入れた授業構想のあり方についての助言
() 学部・研究科のカリキュラムの中での PBL の位置づけの明確化
() PBL 授業に適した教室環境の整備

() その他 ()

PBLを導入して良かったことはどのようなことですか

また、PBLだからこそ得られた成果として挙げられるものはありますか
下にお書きください

PBLで「こういうところがうまくいけばより成果が上がる」と考えられるような課題点がありますか。下にお書きください

(6) あなたが授業に関して工夫していることを教えてください。

該当するもの全てに○を付けてください

- () 振り返り（リフレクション）シートの活用
- () ポートフォリオの作成
- () 関連する文献の紹介
- () moodle などを用いたゴーイングシラバス
(シラバスを基盤として授業を展開できるような授業の進行にあわせて加筆修正していくシラバス)
- () 予習・復習に使える動画の提供
- () 毎回の小レポートの実施
- () 小テストの実施
- () ニュースなどの関連する日常的な情報・話題の提供
- () 相談するための時間の設定
- () 学生間の時間割表の共有
- () 学生による To Do リストの作成
- () 学習者として PBL をうまく進めるための情報の提供
- () プレゼンスキル向上のための情報提供や指導
- () 協同学習の技法の活用（ジグソー法や特派員、LTD 話し合い学習法などの活用）
- () 他クラスとの交流
- () PBL による成果の（学生による）研究発表
- () 授業担当教員以外の実践者や専門家からの（学生に向けての）講演・指導

- () 実際の問題解決との関わり (例えば、実際にある地域の人と関わって問題解決を進める、など)
- () moodle の活用
- () e-portfolio システムの活用
- () 上記の 2 つ以外の ICT の活用 (具体的に：)
- () ワークシートの活用 (具体的に：)
- () 授業専用の教材の作成 (具体的に：)
- () 成果の確認のためのレポート提出
- () 成果の確認のためのクラス内発表会
- () 成果の確認のためのクラス外の人も含めた発表会
- () 授業改善のための独自の授業評価の実施
- () 授業改善のための PBL や高等教育に関わる文献の参照
- () 授業改善のための研修・ワークショップなどの受講
- () 授業に関して他の教員と相談をしあう
- () その他 (具体的に：)

ご回答ありがとうございました。記入漏れがないか確認してください。

本調査での回答に関しては、大学での教育改善に利用させていただきます。

なお、ここでの回答によるデータを、外部に向けて教育成果を発信するための研究目的で使用することに同意していただけますか。お手数ですが、同意していただける場合には下の「同意する」に、同意いただけない場合には「同意しない」に○をお願いいたします。

同意する / 同意しない

大学でのPBL授業に関する調査（授業実施教員対象）

この調査は、大学でのPBL授業の実践について尋ねるために行うものです。
正しい答えや、間違った答えというものはありません。思った通りにお答えください。
回答された調査用紙は記号化され、コンピュータにより統計的に分析されます。そのため、本調査への回答の有無や回答の内容によって、ご協力いただいた方にご迷惑をおかけすることは決してありません。
この調査は、コンピュータにデータを入力後、シュレッダーにて処分するなど、個人情報の保護をいたします。

回答へのご協力をぜひともよろしくお願いたします。

※現在、三重大大学の教員全員を対象に「大学での授業実践に関する調査」を実施していますが、今回「三重大学PBL推進プロジェクト」から直接学内便でアンケートを受け取った方は、このアンケートにご回答ください。

まずは下記の項目、および、続く質問項目にお答えください。

所属学部・部局： _____

教員経験年数：約 _____ 年
(高等教育機関におけるもの・非常勤も含む)

着任年数：約 _____ 年

年間授業担当コマ数： _____ コマ

氏名（任意）： _____

[氏名を書いていたいただいた場合、インタビュー等の追加のお願いなどをさせていただく場合があります]

本調査での回答に関しては、大学での教育改善に利用させていただきます。
なお、ここでの回答によるデータを、外部に向けて教育成果を発信するための研究目的で使用することに同意していただけますか。お手数ですが、同意していただける場合には下の「同意する」に、同意いただけない場合には「同意しない」に○をお願いいたします。

同意する / 同意しない



このアンケート調査は、Web シラバスの「授業の特徴」において「PBL」にチェックされた授業を担当されている先生にお送りしています。そこで挙げられた授業についてご回答ください。

(1) PBL を取り入れている授業は具体的には、どの授業ですか。

授業名をよろしければ教えてください。(任意回答)

なお、回答されなかった場合も含め、複数の授業で PBL を取り入れられている場合は、そのうち 1 つを選んでください*。

これ以降の質問については、その授業を念頭に置いてお答えください。

また、その授業の担当者としての位置づけはどのようなものですか。

(必須回答)

*1 PBL を実施されている授業が複数ある場合は、その分だけアンケート用紙が同封されています。少なくとも 1 つの授業につきましてはぜひご回答ください。なお、可能な限り全ての PBL 授業について、ご回答いただけますと幸いです。

授業名 (任意): _____

(必須) 担当者としての位置づけ (授業名を書いていたいない場合もご回答ください)

- 共通シラバスの授業が複数あり、その統括に関わっている
- 共通シラバスの授業が複数あり、その 1 つの主たる担当者である
- 共通シラバスの授業が複数あり、その 1 つに関わっているが主たる担当者でない
- 単独の授業であり、その主たる担当者である
- 単独の授業であり、それに関わっているが主たる担当者でない
- その他 (_____)

(2) 当該授業のカリキュラム上の位置づけについて教えてください。

履修年次

_____ 年次

カリキュラム上の位置づけ

- 基礎的内容の習得をめざす基礎科目である
- 基礎的内容の応用や活用を主とする応用/発展科目である
- その他

- 選択科目 必修科目

他の授業科目との関係性はありますか (例えばセットになっている科目があるなど)

(以下に自由記述でお答えください)

(3) PBL の形式について教えてください。PBL を取り入れている授業では以下のうちの形式を採用されていますか。該当するもの全てに○を付けてください。

- () ①問題提示型 (Problem-based Learning) : 教員が問題・課題を設定
- () ②問題自己設定型 : 学生自身が問題・課題を設定
- () ③プロジェクト型 (Project-based Learning) : プロジェクトの遂行
- () ④実地体験型 : 実際に現場体験を伴うもの
- () その他 ()

(4) PBL の実施期間について教えてください。

該当するもの1つに○を付けてください

- () 授業期間全体を通して実施
- () 1回の授業のみで実施
- () 1回の授業で完結する PBL を複数回実施
- () 複数回の授業で完結する PBL を1回実施
- () 複数回の授業で完結する PBL を複数回実施

(5) Tutor や TA について教えてください。

該当するもの全てに○を付けてください

- () 教員ポストの人員が Tutor として関わっている
- () 大学院生が Tutor/ TA として関わっている
- () 学部生が Tutor/ TA として関わっている
- () 上記以外の方が Tutor/ TA として関わっている
- () Tutor/ TA は採用していない

Tutor/TA の一人あたりの担当学生数は何人くらいですか

_____人

Tutor/TA の役割とはどのようなものですか

Tutor/TA と担当教員とはどのような関わりを行っていますか

(6) PBLの詳細について教えてください。

該当するもの全てに○を付けてください

- 理解を深めさせることを目的として導入した
- たくさんの知識を身につけさせるために導入した
- 活用・応用の力を身につけさせるために導入した
- 自己学習力、自己探求力を身につけさせるために導入した

- ある程度決まった解がある課題を用いている
- 多様な解がある課題を用いている
- 特に解はなく、活動を行うことそのものが目的となっている課題を用いている

- 学習課題は全て教員が準備したものである
- 学習課題は全て学生が設定したものである
- 学習課題のうち一部は教員が設定し、一部は学生が設定している
- 学習課題は教員と学生とが共同で設定している

- moodle を使っている
- e-portfolio システムを使っている
- 上記2つ以外の ICT を使っている (具体的に: _____)

- ワークシートを使っている (具体的に: _____)
- PBL 専用の教材を使っている (具体的に: _____)

- PBL を進めるにあたり成果物を作る (具体的に: _____)

- 成果の確認のためにレポートを書かせている
- 成果の確認のために同じ授業の受講者を前にした発表会を行っている
- 成果の確認のためにクラス外の人にも前にした場で発表会を行っている

- 授業改善のために独自の授業評価を行っている
- 授業改善のために PBL や高等教育に関わる文献を参照している
- 授業改善のために研修・ワークショップなどを受けた

クラスサイズ・グループサイズ・グループ数を教えてください

クラスサイズ _____ 人・固定 or 変動 _____ 人グループ・ _____ グループ (グループ数)
(変動グループの場合は、変動の範囲をお答えください)

授業内、授業外における、学生への教員の関わり方はどのようなものですか

(授業内)

(授業外)

どのような評価方法を用いていますか（該当するもの全てに○を付けてください）

- 学力を問うペーパーテスト
- （実際に行動させることを伴う）パフォーマンス評価
- レポート等の提出物による評価
- ポートフォリオ評価
- ルーブリック評価
- 学生相互評価
- 自己回答式の段階評定尺度
- 観察評価
- 出席点
- その他（具体的に： _____)

PBL を始めるきっかけはどのようなものでしたか

- 自らの意志によって始めた
- 外的な要請により始めた

- 学内の FD 研修会
- 学外の FD 研修会
- 他の教員からのすすめ（学内・学外←該当するものにチェック）
- 学生の成果発表などを見て（学内・学外←該当するものにチェック）
- 文献などから
- みずから工夫した方法が結果的に PBL だった
- 業務の一環として
- その他（具体的に： _____)

PBL を進めるための予算はどのようなものですか

必要額： _____ 円 出所 _____

(7) PBL の実施に関わってどのような工夫をされていますか。

該当するもの全てに○を付けてください

- 振り返り（リフレクション）シートの活用
- ポートフォリオの作成
- 関連する文献の紹介
- moodle などを用いたゴーイングシラバス
(シラバスを基盤として授業を展開できるような授業の進行にあわせて加筆修正していくシラバス)
- 予習・復習に使える動画の提供
- 毎回の小レポートの実施
- 小テストの実施
- ニュースなどの関連する日常的な情報・話題の提供
- 相談するための時間の設定
- 学生間の時間割表の共有
- 学生による To Do リストの作成
- 学習者として PBL をうまく進めるための情報の提供

- () プレゼンスキル向上のための情報提供や指導
- () 協同学習の技法の活用 (ジグソー法や特派員、LTD 話し合い学習法などの活用)
- () 他クラスとの交流
- () PBL による成果の (学生による) 研究発表
- () 授業担当教員以外の実践者や専門家からの (学生向けの) 講演・指導
- () 実際の問題解決との関わり (例えば、実際にある地域の人と関わって問題解決を進める、など)
- () 授業に関して他の教員と相談し合う
- () その他 (具体的に: _____)

(8) PBL のさらなる展開に関わって、意見をお聞かせください。

PBL をさらに充実・展開していくためにどのようなサポートが必要だと思いますか
該当するものに○を付けてください (複数回答可)

- () PBL 授業の実践に当たって相談や助言、資源の提供が受けられる
 [具体的には: _____]
- () 学科の中に PBL について相談し合える教員グループがある
- () 学部の中に PBL について相談し合える教員グループがある
- () 全学に PBL について相談し合える教員グループがある
- () 学部や研究科で、PBL を推進する委員会等がある
- () 参考になる PBL の授業事例集がある
- () TA などの人的な授業支援がある
- () 授業経費などの経済的な授業支援がある

- () 効果的な事例問題の開発
- () 効果的なプロジェクト課題の設定
- () PBL を取り入れた一授業科目の授業の計画の仕方の助言
- () 効果的な PBL を取り入れた授業構想のあり方についての助言
- () 学部・研究科のカリキュラムの中での PBL の位置づけの明確化
- () PBL 授業に適した教室環境の整備
- () その他 (_____)

PBL を導入して良かったことはどのようなことですか
また、PBL だからこそ得られた成果として挙げられるものはありますか
下にお書きください

PBL で「こういうところがうまくいけばより成果が上がる」と考えられるような課題点がありますか。下にお書きください

PBL 教育推進プロジェクト メンバー

山田 康彦 (教育学部, 地域人材教育開発機構) プロジェクトリーダー
岩崎 恭彦 (人文学部, 地域人材教育開発機構)
久保田 祐歌 (地域人材教育開発機構, 平成 30 年 4 月より他大学に転出)
近藤 諭 (附属病院, 地域人材教育開発機構)
下村 智子 (教養教育院, 地域人材教育開発機構)
竹内 佐智恵 (医学部, 地域人材教育開発機構)
中西 康雅 (教育学部, 地域人材教育開発機構)
中西 良文 (教育学部, 地域人材教育開発機構)
野呂 雄一 (教養教育院)
宮崎 多恵子 (生物資源学部, 地域人材教育開発機構)
守山 紗弥加 (教養教育院)
山本 裕子 (地域人材教育開発機構)
和田 正法 (教養教育院, 地域人材教育開発機構)

山本 俊彦 (理事)

三重大学 PBL 教育実態調査報告書

2018 年 11 月 14 日 発行

発行・制作 三重大学 地域人材教育開発機構

〒514-8507 三重県 津市 栗真町屋町 1577 総合研究棟 II 3F

Tel : 059-231-5615

<http://www.dhier.mie-u.ac.jp>

e-mail : chiikijinzaib@ab.mie-u.ac.jp